

井尻 B 遺跡 29

—— 井尻 B 遺跡第 47 次調査の報告 ——



2022

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから中国大陆や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの遺跡が残されています。しかしながら、都市の発展に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財については、本市の重要な責務として発掘調査を行い、記録保存を行っています。

本書は、南区井尻1丁目における住宅建設に伴う井尻B遺跡第47次発掘調査について報告するものです。本調査では、弥生時代から中世までの集落跡が見つかりました。この中でも、弥生時代、飛鳥・奈良時代、中世の各時期の区画溝は井尻B遺跡での土地利用の変遷を示すとともに、中世の溝に伴う石敷遺構は道路遺構などの可能性があり、注目されるものです。また、飛鳥時代末から奈良時代初めの瓦片が多数見つかり、「井尻廐寺」に関する遺構が近くにあることを推測させるものとなりました。その他、飛鳥時代と想定されるガラス管玉は類例が少ないものであり、貴重な発見となりました。

これらの調査成果は、当遺跡が地域の歴史において重要であることを示しており、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社オープンハウス・ディベロップメントをはじめとする関係者の方々には、発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、令和2年11月10日から令和3年1月15日まで発掘調査を実施した井尻B遺跡第47次調査の報告書である。

2. 発掘調査は、住宅建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行っている。

3. 遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をS-D、堅穴住居をS-C、掘立柱建物をS-B、土坑をS-K、柱穴などピット状遺構をS-P、その他の遺構（不明遺構、特殊遺構など）をS-Xとした。

4. 本書の遺構図に用いる方位北は、国土座標北である。国土座標は、調査地付近の国土座標基準点（教育委員会埋蔵文化財課設置）から調査地の国土座標を求めており、これら基準点は日本測地系（第II系）であり、その後の周囲調査では世界測地系基準点の使用に変わっているので注意したい（Fig.3では国土地理院ホームページの座標変換ページに基づき世界測地系上の位置を求めている）。調査区の標高は、いずれも道路下水道局が市立小学校（本調査では宮竹小学校）に設置している水準点のレベルを移動して求めている。

5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住および埋蔵文化財課会計年度任用職員の野村俊之、発掘作業員の前崎智行（福岡大学学生）が行った。ただし、SX001 石敷遺構の平面図および一部土層図の基礎図となったものは、「九州文化財計測支援団体（CMAQ）」代表の永見秀徳氏が写真撮影を行い、metashapeで作成した3D画像であり、その3D画像による俯瞰画像ないし立面画像を久住が製図して図化したものがある。遺物の実測は、埋蔵文化財課技能員の野村美樹および久富智美子が主に行い、ガラス管玉や一部の土器の実測を久住猛雄が行ったほか、製図時に久住が全ての図を点検して修正したものがある。製図は久住のほか野村美樹（技能員）が主に行い、また一部を本田浩二郎、山本晃平（埋蔵文化財課）がデジタルトレースを行った。

6. 本書に用いる写真は、遺構写真是主に久住が撮影した。ただし、調査区全体の合成俯瞰写真（巻頭図版1）、SX001 石敷遺構写真（表紙写真、巻頭図版2-2・Ph.3～7）、SX(SD)001 土層断面写真（巻頭図版2-3・3-1・4-9）は、「九州文化財計測支援団体（CMAQ）」代表の永見秀徳氏が作成した3D画像である。またガラス管玉写真是埋蔵文化財センターの機器を用いて比佐陽一郎（文化財活用課）が撮影したものである。

7. 本書の編集・執筆は久住が行ったが、ガラス管玉については藤崎彩乃（埋蔵文化財センター）、比佐の教示を得た。また遺構写真的うち3D画像の作成については「九州文化財計測支援団体」代表の永見氏より無償の協力と提供を得た。明記して謝意を表したい。

8. 本報告書においては、紙幅の都合から出土遺物についてと「調査のまとめ」を記述できなかった。前者については挿図（Fig.27～29）に各遺物の簡潔な説明を略して付したので（図中の説明略記の凡例は『那珂80』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1391集参照）、それを説明に替えるものとする。また後者は、「調査の概要」と巻末の「抄録」を参照されたい。

9. 本調査に関する出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

本 文 目 次

I. はじめに	1
II. 調査の記録	5
1. 調査地点の位置と基本土層	5
2. 調査の経過と調査の概要	9
3. 検出遺構	16



1. 井戸B47 次調査状況全体写真（3Dオレゾ合成画像垂直俯瞰写真）※左がII区、右がI区（手前が西）(1/80)



2. SX001 石敷き遺構 3D オルソ合成画像垂直俯瞰写真（I区側は石敷第3面；手前が南）



3. SX001 (SD001) - I区南側壁面土層状況 3D オルソ立面画像 (北から; 1/25)

H : 12.000m



H : 10.000m

2m
1
0

5. SD001-I 区東側南側壁面・SD002 西端南側壁面土層（北から）



6. SD002 第1トレンチ東側土層（西から）



7. SD002 第2トレンチ東側土層（西から）



8. SD002 第3トレンチ東側土層（西から）

4. SX001 (SD001) - II区・SX111・SX003・SD120 南側壁面土層 3Dオルゾ立面画像（北から；1/30）

巻頭図版 4

H: 11.000m

H: 10.500m

H: 10.000m



9. SX001-I 区北側壁面土層 3D オルソ立面画像 (南から; 1/30)

11. SD004-I 区北側壁面土層 (南から)



10. SX001-II 区南側壁面土層 (北から)



12. SK106・(下層) SD107 北側壁面土層 (南から)



13. SX101・102 風倒木跡ベルト土層 (南から)



14. SD105 ベルト土層 (南から)



16. SX104 炉跡上層土層 (北東から) 17. SX104 上層焼土出土状況 (北西から) 15. SX104 炉跡上面検出状況 (東から)



18. SX104 炉跡上層焼土 (北西一南東土層) 断面 (北東から)

19. SX104 炉跡完掘手前、中央ピット下部焼土粒・炭粒出土状況 (北東から)

20-1, 2, 3. SD10
5 上層出土ガラス
管玉写真 (1は小
口部破壊状況、2は
外面、3は内面)



I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区区井尻 1 丁目地内の戸建住宅建設計画に関して、「埋蔵文化財の有無について（照会）」の文書を、令和 2 年 3 月 19 日付で株式会社オープンハウス・ディベロップメントから受理した（事前審査番号 2019-2-1310）。

これを受け、経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻 B 遺跡群（分布地図番号 0090）に含まれており、当該地の隣接地の発掘調査（井尻 B 遺跡 22 次調査；福岡市埋蔵文化財調査報告書第 923 集『井尻 B 遺跡 16』2007 年）の成果からも、当該地には埋蔵文化財が存在する可能性が高いものと判断した。そのため当該地における遺構の密度や深度の確認のため、同地での試掘確認調査が必要なことを申請者に伝え協議した。その結果、令和 2 年 5 月 11 日に確認調査（試掘調査番号 2020-36）を行ったが、想定通り比較的浅い深度で遺構が一定密度検出され、予定される建設工事等は、埋蔵文化財に影響が及ぶものと判断された。この結果を受け、埋蔵文化財の保全等に関する埋蔵文化財課と申請者の間で協議を行った。両者の協議の結果、埋蔵文化財を保全するための工事の設計変更是難しく、予定工事は埋蔵文化財への影響を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、令和 2 年 11 月 10 日から同年 12 月 25 日まで現地における発掘調査の期間とすることとし、令和 2 年 9 月 28 日付で事業主（申請者）を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財調査業務委託契約書を締結した。

発掘調査は令和 2 年 11 月 10 日に開始された。調査開始後に、試掘確認調査による予想を超えて、掘削土量の大きい構造遺構や記録に時間がかかる石敷遺構等が検出されたため、12 月 25 日とした当初の終了予定は困難な状況であることが判明した。このため、埋蔵文化財課と委託者とで再度協議を行い、発掘調査期間について令和 3 年 1 月 15 日まで延長することで合意した。発掘調査は令和 3 年 1 月 15 日に終了した。また資料整理および報告書作成は、令和 3 年度に資料整理を行い、令和 4 年 3 月に報告書を刊行することになった。

なお、当該調査に関する基本情報は下記表のとおりである。

<調査基本情報>

遺跡名	井尻 B 遺跡	調査次数	47 次	調査略号	IGB-47
調査番号	2033	分布地図図幅名	025 井尻	遺跡登録番号	0090
申請地面積	331.33 m ²	調査対象面積	216.39 m ²	調査面積	200.93 m ²
調査期間	令和 2 (2020) 年 11 月 10 日～令和 3 (2021) 年 1 月 15 日	事前審査番号	2019-2-1310		
調査地	福岡市南区井尻 1 丁目 735 番 9				

2. 調査の組織

- 調査委託：株式会社オープンハウス・ディベロップメント
- 調査主体：福岡市教育委員会
(発掘調査 令和 2 年度；資料整理・報告書作成 令和 3 年度)
- 発掘調査および整理・報告総括
経済観光文化局文化財活用部
埋蔵文化財課 課長 菅波正人
埋蔵文化財課調査第 1 係長 吉武学（令和 2 年度）、本田浩二郎（令和 3 年度）
- 事前審査
埋蔵文化財課事前審査係 事前審査係長 本田浩二郎（令和 2 年度）、田上勇一郎（令和 3 年度）
事前審査係主任文化財主任 田上勇一郎（令和 2 年度）、森本幹彦（令和 3 年度）
事前審査係文化財主任 三浦悠葵
- 発掘調査および整理・報告庶務
文化財活用課管理調整係 松原加奈枝（令和 2 年度）、井手瑞江、内藤愛（令和 3 年度）
- 発掘調査および整理・報告担当
埋蔵文化財課調査第 1 係 久住猛雄

3. 周辺の地理的歴史的環境

井尻 B 遺跡は、福岡平野の中央部、那珂川と御笠川水系にある諸岡川に挟まれた段丘上にあり、弥生時代から古墳時代に栄えた「奴国」とされる地域の二大拠点集落（「都市的」との評価もある大規模遺跡）である須玖岡本遺跡群（春日市）と比恵・那珂遺跡群（博多区）を結ぶ線上のほぼ中間に位置している（Fig. 1）。井尻 B 遺跡には、主に弥生時代から古墳時代前期前半の集落と墳墓（註 1）、古墳時代中期の古墳（井尻 B 1・2 号墳）

(註2)、飛鳥時代末期（九州須恵器編年VI期と飛鳥編年IV期、7世紀第4四半期）～平安時代初め（9世紀）頃の集落・官衙・推定寺院址（「井尻庵寺」）などが展開する（Fig.2）。井尻B遺跡は、大正年間にすでに九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士が踏査および不時発見の遺構の部分的な調査（遺物採集・断面観察など）を行い、弥生時代の甕棺墓や「堅穴」、古代寺院址の基壇の可能性がある整地層の存在についてすでに報告し、井尻B遺跡は考古学界に知られていた（中山平次郎 1925・1927）。さらには、近世福岡藩の国学者である青柳種信による『筑前国續風土記拾遺』にも、那珂郡井尻村の条において、「熊野権現」の「鉢の鎧範」（推定地はFig.2の「イ」）や、「大塚」（井尻B 1号墳のことか？）、「古瓦多く」「昔大寺など有りし」（「井尻庵寺」のことだろう）との記述がすでにみられ、「遺跡」との認識が早くからあった地区といえる。なお「井尻庵寺」については、井尻B3次調査の報告書における考察があり（福岡市埋蔵文化財調査報告書第411集、以下福岡市の埋蔵文化財調査報告書は「福岡市報〇集」と略す）、その推定範囲や古代瓦が多数出土した層について触れられている。その3次調査検出の南北溝（寺域の東側区画溝）か延長線上の試掘調査により、寺院址域の北東隅角の可能性がある溝が検出されており（福岡市事前審査番号9-2-220）、その範囲はFig.2のように推定される（福岡市報788集参照）。

井尻B遺跡は、およそ南北900m、東西300mの広がりを有する遺跡である。遺構密度が大きくなり、遺物の出土も多くなる、弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭の遺跡（居住域+墓域）は約25ha近い範囲があり、特に弥生時代後期中頃～終末期の遺構は濃密である。單に大規模な集落遺跡であるだけではなく、青銅器・ガラス・勾玉・生產関係遺物（鋳型・取瓶、インゴット状青銅塊）の出土（北部の11次、17次の各区、南部の6次など）からは、一般的には弥生時代の「拠点集落」としてもよい内容も備えている（久住猛雄 2015ab；福岡市報1251集参照）。ただし井尻B遺跡が所在する福岡平野には、井尻Bの4～5倍の規模がある、北は比恵・那珂遺跡群（福岡市博多区）、南は須玖岡本遺跡群（春日市）という特大規模（100ha以上）の同時期（弥生時代中期～終末期前後）の遺跡があり（Fig.1）、井尻Bは第2ランクであることも注意されるが、一般的には他地域であればトップクラスの規模と内容を有するのが井尻B遺跡である。井尻Bの弥生時代遺跡は、前期から中期初頭の遺構分布は散発的だが（註3）、中期前葉（須政I式）以降になると継続的かつ以降分布が広がる。現状では弥生時代中期前葉から後期前葉までは遺跡北半部に遺構の展開の主



Fig.1 井尻B遺跡の位置と周辺遺跡分布図 (1/30,000)

- Fig.1 井尻B遺跡の位置と周辺遺跡分布図遺跡名一覧
1. 井尻B遺跡
 2. 那珂遺跡群
 3. 井尻C遺跡
 4. 五十川遺跡
 5. 井尻A遺跡
 6. 麦野A遺跡
 7. 那珂君体遺跡
 8. 板付遺跡
 9. 高畑遺跡
 10. 諸岡A遺跡
 11. 諸岡B遺跡
 12. 寺島遺跡
 13. 笹原遺跡
 14. 三筑遺跡
 15. 友野B遺跡
 16. 麦野C遺跡
 17. 南八幡遺跡
 18. 雜納限遺跡
 19. 笠拔遺跡
 20. 三宅C遺跡
 21. 横手遺跡
 22. 佐伊遺跡
 23. 御陵遺跡
 24. 野藤・浦田遺跡
 25. 弥永原遺跡
 26. 林添遺跡
 27. 須玖遺跡群（須玖・岡本遺跡群）
 28. 下大荒遺跡
 29. 大荒遺跡
 - ※23, 24, 26～29は春日市 A. 那珂八幡古墳 B. 今宮神社古墳 C. 諸岡3号墳
 - D. 板付八幡古墳
 - E. 井尻1号墳
 - F. 井尻B 2号墳
 - G. 御陵古墳
 - H. 野藤古墳
- （注）上図の遺跡範囲はおそらく上図上の包囲地範囲は調査研究の進展により変動している場合があるので注意されたい。また本図の遺跡（埋蔵文化財包囲地）の範囲は、隣接する春日市域のものも含まれている。

体があるが、当該時期の墳墓遺構（甕棺墓など）は南半部にもあり、同時期の集落（居住域）が南半部にも現状での分布状況よりも存在した可能性は高い（註4）。後期中葉以降は遺構分布域がさらに広がり、後期後葉には井尻Bにおける南北の遺構分布は一体化する。その後、古墳時代初頭（註5）まで大規模集落跡として継続するが、古墳前期前葉に遺構数や遺物量が激減し、前期中葉以降の集落遺構はごくわずかになってしまふ。古墳前期後半以降の集落遺構が顕在化するのは後期後葉（九州須恵器編年ⅢB期）以降に散発的にみられるようになつてからである（註6）。

弥生時代中期から古墳時代前期の集落には、いくつかの溝状遺構がみられる。10次（福市報678集）では下層に弥生時代中期後葉（須玖Ⅱ式古相）の土器群が出土した条溝があり、溝が途切れる陸橋部分には、1×1間の「門柱」を想起させる建物遺構があり、集落の出入口施設の可能性があるが、条溝の延長は不明で、今のところ井尻B遺跡を大きく囲むような「濠環」的な溝状遺構とはみられない。遺跡北端の17次F区（福市報787集）と36次（同1217集）は同一の直線的な溝であるが、弥生時代後期後葉から終末期前後の掘削とみられ、地形（段丘を縦wiseに走行）や下層覆土の滯水性土質から、多目的水路的な機能が考えられる。遺跡中部（南半部北端）の1次では、弥生後期～古墳前期の水路と水溜遺構がある（福市報111集）。削平のため導水路が不明だが、1次の大型湧水土坑SH04（弥生時代後期？）は「溜井」の可能性があり、これらから北西側の五十川遺跡との間の井尻B遺跡段丘の北西部や、段丘東側据部の低地には、同時期の水田が存在した可能性が想定される。また今回の47次調査で検出したSD002は、当初の掘削は弥生時代終末期の可能性があり、段丘北端で東西に走行するが、下層埋土には滯水痕跡があり、一次的にはやはり水路的な機能が考えられ、この溝が流れ込む段丘北東側にも水田の存在が示唆される。ただし17次F区・36次の溝と47次SD002は直交するような方向にあり、あるいは遺跡北端を区画する用途もあった可能性も残す。今後の周辺での調査の進展による解明が期待される。弥生時代中期以後の集落の展開としては、井尻Bでの井戸の掘削が中期前葉～中項



Fig. 2 井尻B遺跡全体図（調査地点位置図）(1/5,000)

(須玖 I 式新相) から始まることが注意される(4次戸戸40、32次SE111)。段丘中央での戸戸の掘削は、段丘掘における湧水の利用ではなく、段丘居住域内に生活用水の確保を求めたということであり、それ以後の段丘上の継続的な集落展開の成立面となる出来事である。戸戸B遺跡は、北にある比恵・那珂遺跡群に次いで弥生時代中期から古墳時代前期前半の戸戸の掘削数が多く、特に後期前葉から終末期は戸戸が多い。戸戸Bの戸戸の掘削開始に前後して、甕棺墓地が營まれ始める(16次・17次E区、22次周辺)。汲田式(須玖 I 式中頃～新相)の時期である。この時期に戸戸Bの南北に居住集団が定着し、開発拠点的に集落が成立していったことを示す。

戸戸Bにおける弥生時代から古墳時代初頭頃までの墓地の動向については25・32次報告(久住2015a)に詳しいので割愛するが、戸戸B遺跡においては「古墳」も展開していることが注意される。遺跡南端の34次の方形周溝状遺構は、報告(福市報1106集)では否定的であるが、「方形周溝墓」の可能性が高く時期も古墳時代初頭であるから、実質的に「古墳」として差支えない(註7)。さらに10次のL字型に屈曲する古墳時代前期前葉の幅広の「溝1」は(福市報678集)、溝の規模や断面形などから、「方墳」の周溝である可能性がある。その場合、推定だが周溝下端内法で一辺20m以上となるう。2・5次地点(福市報175・411集)には古墳時代中期中葉(TK216併行期)の有黒斑の円筒埴輪・器物埴輪を伴う径25cm前後の円墳である戸戸B 1号墳は、やや小規模ながら本地域の「首長墓」の一つある。なお調査区がやや離れるが、南東側の28次出土の器物埴輪(家形)は(福市報974集)、戸戸B 1号墳に本来伴うとみられる。戸戸B 1号墳がある2次調査では、弥生時代後期後葉から古墳時代前期の墳墓群が展開していることも注意される(註8)。最近の調査では、1号墳の北西約150mの45次調査において、円墳の周溝(径20m前後か)とみられる溝から、円筒埴輪(無黒斑の窓室焼成)が出土しており、「戸戸B 2号墳」としてよく、おそらく1号墳の次の古墳中期後葉の小首長墓であろう。しかしこれら古墳時代中期の集落遺跡は、戸戸Bはもとより周辺の遺跡を含めても明確であり、その解明は今後の調査の進展に委ねられるところが大きいが、集落遺跡の減少は古墳時代前期中葉から福岡平野全体で始まる傾向であるので、遺跡の動態・変遷は、広く福岡平野全体で見ていく必要があるだろう(註9)。

戸戸Bでは古墳時代後期後葉から再び散発的に遺構が展開し始めるが、これは比恵・那珂遺跡群における「那津官家」の成立と展開に伴う周辺の再開発と関係があるだろう。それが前提となって、飛鳥時代末期における戸戸Bの集落・官衙・寺院の成立展開があると考えられる。この時に出現する遺構群は正方位を志向し、推定寺院址(戸戸B寺寺)、官衙城、倉庫城、一般居住域(官人居住域?)が整然と配置された計画的集落遺跡であった可能性が高く、東西南北の区画溝や道路状遺構による広域の「街区」的空間があつた可能性が指摘できる(福市報923集)。なお寺院址推定城以外の「官衙城」(17次周辺)でも瓦が出土し、掘立柱建物に部分的に瓦を葺いた「費棟」の官衙建物の存在が示唆される。これらの官衙遺構群や寺院址は飛鳥時代末期～奈良時代初頭前後であるが、17次A区の文字瓦に「豊評」「山部評」とあり、「郡」ではないので、大宝律令(701年)以前の成立で、また遺構群の展開様相を考慮すると、「那珂評(郡)術」が、一期期戸戸B遺跡に所在した可能性も考慮すべきであろう。また今回の47次調査で後世(中世後期)の石敷遺構に入れ込まれた古代瓦片は、調査面積を考慮すると官衙城の17次の出土量を凌駕する傾向があり、遺跡北端付近に何らかの瓦葺建物(たとえば「門」など?)があった可能性もある。その後、奈良時代中頃になると遺構・遺物は戸戸B全体で減少し、平安時代初め(9世紀)頃までは遺構がある程度存続するが、分布域は減少し、10世紀以降の古代へ中世の戸戸Bにおける遺構分布は非常に少ない傾向にある。しかしそのことにより、700年前後の古代の正方位街区の名残が、現在の地割や小路にも伝わっている(福市報923集)要因になっているとも考えられる。

<参考文献・註記>

久住猛雄 2015a 「戸戸B遺跡の立地と歴史的環境」福市報1251集

久住猛雄 2015b 「戸戸B 25次および32次調査の成果と戸戸B遺跡の弥生時代集落の展開について」福市報1251集

中山平次郎 1925 「戸戸Bの弥生式遺跡」『考古学雑誌』第14巻第12号

中山平次郎 1927 「戸戸および寺福童の櫛塚」『考古学雑誌』第17巻第12号

註1) 戸戸B遺跡における弥生時代から古墳時代前期の集落と墳墓の動向については久住2015a参照。また次の文献も参照されたい。宮井善重 2020 「弥生時代 20世紀 戸戸B遺跡 独創さをさえた有力集落」『近畿新福岡市史 資料編 考古② 遺跡からみた福岡の歴史―東部編―』福岡市博物館史編集室さん室

註2) 「戸戸B 2号墳」については近年中に報告予定である。また「Fig. 2」の古墳時代初頭～前期前葉の「3号墳」「4号墳」については仮称である。これらは、「方形周溝墓」の可能性は高いとしても「古墳」に含めるべきでないという意見、また「古墳」と認めて「戸戸B古墳群」としての「号数」には含めるべきでないという意見がある。

註3) 戸戸B遺跡の北東部に接する五十川遺跡南部に弥生時代前期初頭から中期初頭前後の遺構と遺物の展開があり、弥生前期の遺跡動態に関しては、五十川遺跡の動向とあわせて検討する必要がある。

註4) 久住2015(註1前掲)参照。また宮井2020(註1前掲)でも、弥生時代中期土器の破片が弥生後期以降の遺構から多く検出される状況から、弥生時代後期集落の展開により中期の遺構が多く削除された可能性を指摘している。

註5) ここでいう「古墳時代初期」は、畿内の「布留0式」古墳併行期(下限文献の「I A期」)、「古墳前期前葉」は布留0式新相～布留1式併行期(「I B期～II C期」)を指す。久住猛雄 2017 「福岡県(系島・早良・福岡平野)『九州島における古式土器群』発表要旨集・基本資料集」第19回九州後方陣墳研究会実行委員会

註6) 戸戸B遺跡の弥生時代集落の濃密な展開が古墳時代初期(註5)までは続ぐが、古墳前期前葉には衰退する様相は、須玖岡遺跡群が弥生時代終末期まで(註5文献の「I B期」まで)は進行するが、古墳初期には衰退するという様相と、比恵・那珂遺跡群では古墳前期前葉までは進行し、古墳中期後葉(後半古墳)、註5文献の「II A期(古墳相)」に衰退する様相の傾向があることは興味深い。

註7) 古墳時代の「方形周溝墓」は、本来は直丘丘に有したものもあり、「古墳」とすることができます。34次の「周溝」が「古墳」であることについては、久住2015(註1前掲)に詳述している。また戸戸B 10次「溝」の断面形は比恵遺跡群6次の「比恵1号墳」(福市報94集)、那珂遺跡群9次・62次・114次等の那珂遺跡群における古墳時代前期の「周溝墓」群の周溝に類似している。

註8) 2次(福市報175集)の土壤塙・石蓋土塙墓の上限群の上限が弥生時代後葉で、下限は水銀朱とベンガラが伴う土壤塙は古墳時代初頭

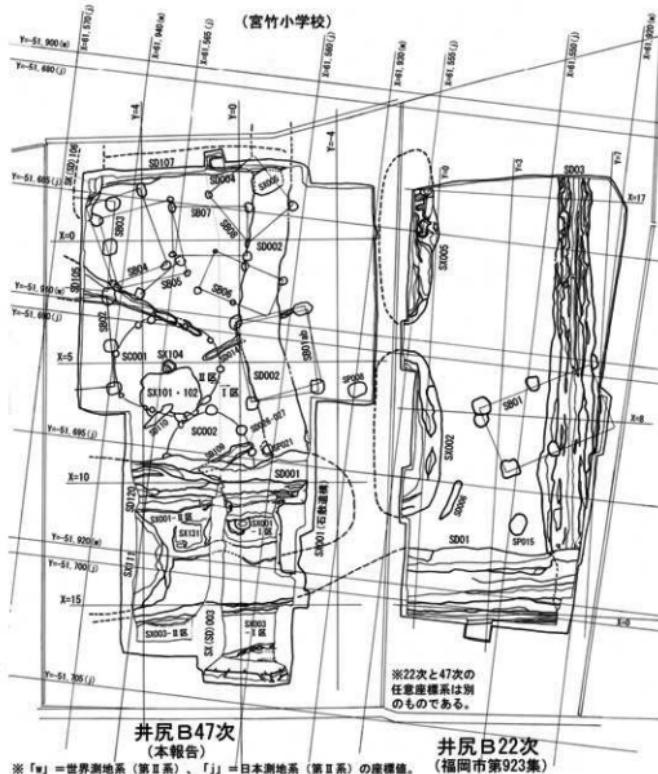
頃、ベンガラのみの石蓋土壙墓は古墳前期前葉だろう。小型方形周溝墓の主体部である16号土壙墓(は本来は箱式石棺ないし石棺系小室ならば古墳前期後半で、また調査SD01は古墳前期の円形周溝墓の可能性がある。

註9) 井尻B遺跡を含めた福岡平野の弥生後期～古墳前期の遺跡動態については下記を参照されたい。久住猛雄2019「筑前西部～中央（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋郡南部・二日市地区北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・長居館跡・交易拠点『集落と古墳の動態II—古墳時代前期末～古墳時代中期～追加資料』第22回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表資料集。

II. 調査の記録

1. 調査地点の位置 と基本土層

井尻B遺跡47次調査地点(以下、「47次」と略す)は、井尻B遺跡の北端付近に位置する(Fig. 2)。「井尻廃寺」推定地から北に約400mの地点である。南側隣接敷地では、22次調査(福岡市報923集)が行われている(Fig. 3)。22次では南北に延びる「SD01」が西側にあり、その延長があると予想しているほか、近世頃の溜井状構造であるSX002、S



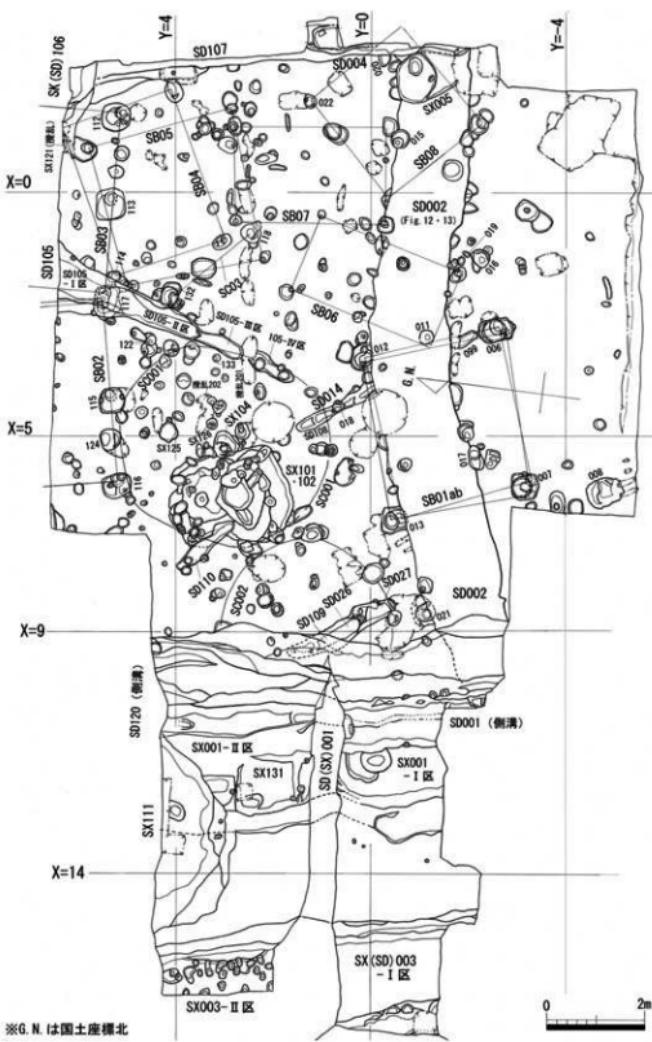


Fig. 4 井戸B47 次調査遺構分布図 (1/100)

東から西へ低くなるだけではなく、南から北側に若干傾斜している。調査区東側では、20表1. II区北壁西側土~40cm前後の近年の盛土層が表土となり(Fig.15下段土層図参照)、これを除去すると遺構層(Fig.5)説明(1)検出土面の鳥栖ローム上面となる。ただし調査区東半でも北壁側には近年の盛土(客土)層の下に若干の二次的包含層(遺物は僅少)があり、この下部のG L-30~40cmで鳥栖ローム上面となる(Fig.15上段土層図参照)。しかし元の地形が浅い谷部で低くなっていたと考えられる、調査区中央西側のSD(SX)001以西では、表土の近年の盛土(客土)層の下に、厚い堆積層(近世以降の盛土か)があり、その下部に二次的包含層があり、これを除去して遺構検出土面(SD(SX)001覆土上面推定地盤層上面ないし鳥栖ローム上面となって遺構が検出できる(Fig.5・7、卷頭図版2-2・3-4の土層図・写真参照)。SD(SX)001およびSD(SX)003上部の(Fig.5)1~4・

表 1. II区北壁西侧土壤剖面 (E₁-E₂) 赋性 (1)

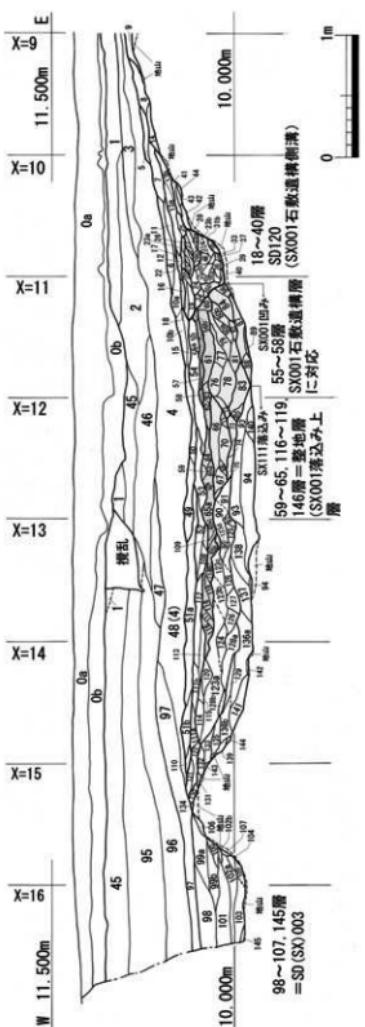


Fig. 5 II区北壁西侧 SX003, SX111, SD(SX)001, SD120 ほか土層断面図 (1/40)

2. 調査の経過と調査の概要

47次調査は令和2年11月10日に、まず重機による表土掘削から開始した。また敷地面積の約2/3を調査

表 2. II 区北壁西侧土層 (Fig. 5) 說明 (2)

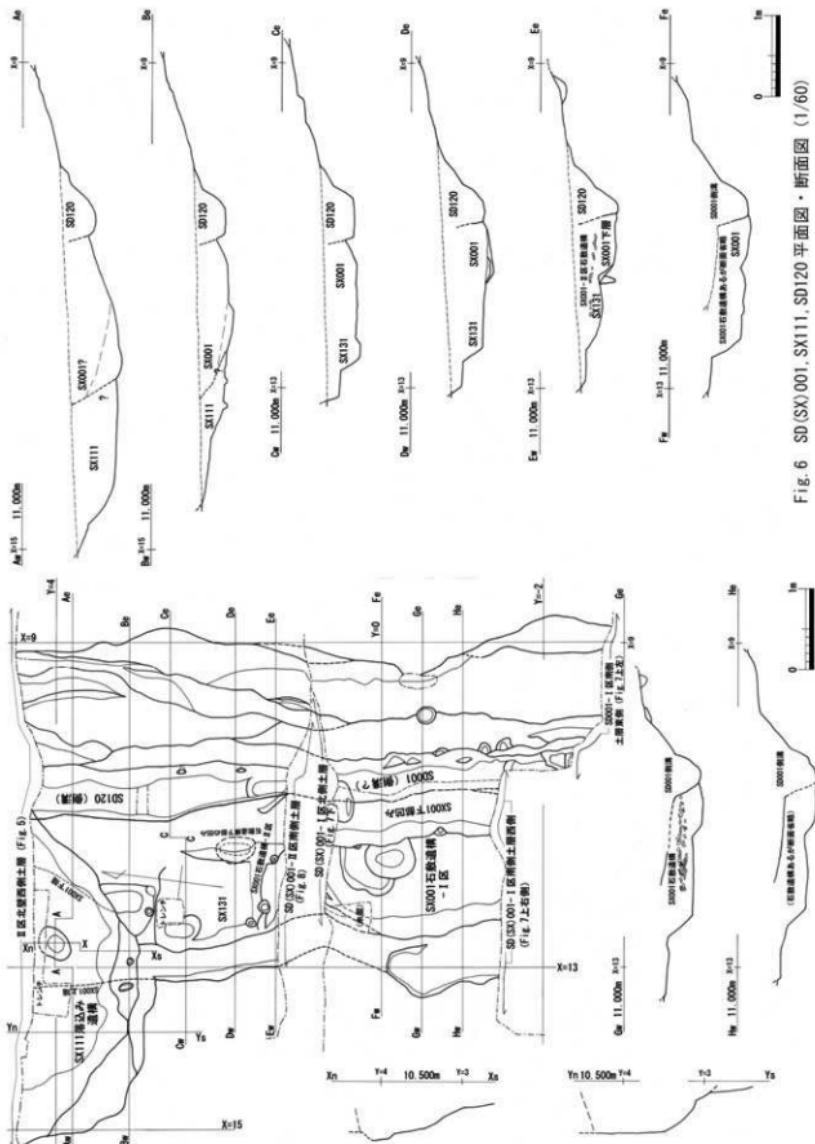


Fig. 6 SD(SX)001, SX111, SD120 平面図・断面図 (1/60)

対象とするもので、掘削廃土置場の確保の関係から、南北の細長い調査区（南：I区／北：II区）に分けて反転掘削をする予定とした。I区東側では遺構が比較的浅く検出されたが、西側では遺構検出面レベルが落ち込んでいるのが分かる（前項参照）。掘削土量から廃土置場の確保に不安が生じた。また遺構検出の早い段階で、事前の試掘調査トレンドでは検出できていなかったSD001、SD002が検出され（Ph.2）、いずれも相当の掘削土量が見込まれたことから、必要作業日数や掘削作業推定のペースからみて、予定の調査期間内に終了するかどうかが問題

50001-2 管理者代表 50001 第四人

30. (上) 周波数 < 26 层以上(或)標準地
上+10% (或) 地盤上+5% (或) 地盤中+5%
減少 5% (或)

32. (上) 最高の「強度」地盤 (或)「強度」地盤
上+10% (或) 地盤上+5% (或) 地盤中+5%
減少 5% (或)

33. (上) 周波数 < 23 層以上 (或)「明るい引
張」地盤 (或)「明るい引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

34. (上) 周波数 < 20 層以上 (或)「暗めの引
張」地盤 (或)「暗めの引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

35. (上) 周波数 < 18 層以上 (或)「暗めの引
張」地盤 (或)「暗めの引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

36. (上) 周波数 < 15 層以上 (或)「暗めの引
張」地盤 (或)「暗めの引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

37. (上) 周波数 < 12 層以上 (或)「暗めの引
張」地盤 (或)「暗めの引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

38. (上) 周波数 < 10 層以上 (或)「暗めの引
張」地盤 (或)「暗めの引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

39. (上) 周波数 < 8 層以上 (或)「暗めの引
張」地盤 (或)「暗めの引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

40. (中) 周波数 < 15 層以上 (或)「明るい引
張」地盤 (或)「明るい引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

41. (中) 周波数 < 12 層以上 (或)「明るい引
張」地盤 (或)「明るい引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

42. (中) 周波数 < 10 層以上 (或)「明るい引
張」地盤 (或)「明るい引張」地盤上+10% (或)
地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或) 地盤中-5%
減少 5% (或)

43. 明るい地盤 (或)「明るい地盤」地盤上+5%
(或)地盤中+5% (或)

44. ~79 = 79000 西端断面土

44. -30~39 層以上 (或)「暗めの引張」地盤 (或)
「暗めの引張」地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或)

45. 23~29 層以上 (或)「明るい引張」地盤 (或)
「明るい引張」地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或)
地盤上-5% (或) 地盤中-5% (或) 地盤中-10% (或)
減少 5% (或)

46. 15~22 層以上 (或)「明るい引張」地盤 (或)
「明るい引張」地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或)
地盤上-5% (或) 地盤中-5% (或) 地盤中-10% (或)
減少 5% (或)

47. 8~14 層以上 (或)「明るい引張」地盤 (或)
「明るい引張」地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或)
地盤上-5% (或) 地盤中-5% (或) 地盤中-10% (或)
減少 5% (或)

48. 1~7 層以上 (或)「明るい引張」地盤 (或)
「明るい引張」地盤上+5% (或) 地盤中+5% (或)
地盤上-5% (或) 地盤中-5% (或) 地盤中-10% (或)
減少 5% (或)

表 4. SD(SX)001-I 区南壁東側 (・SD002 西端) 土層 (Fig. 7 上左側) 説明

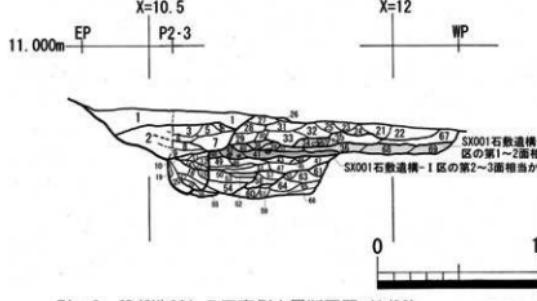


Fig. 8 SD(SX) 001-II区南側土層断面図 (1/30)



Ph. 2 SD(SX)001-I 区西側上部掘削状況（南西から）

表 5. SD(SX)001-I 区南壁中央～西侧土層
(Fig. 7 上右側) 説明 (1)

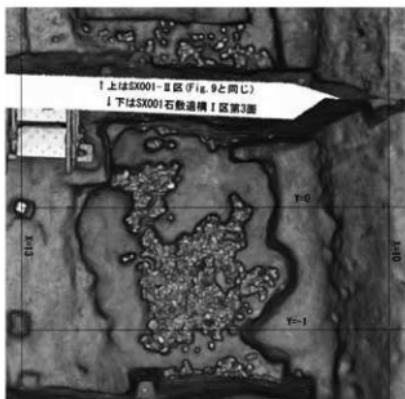


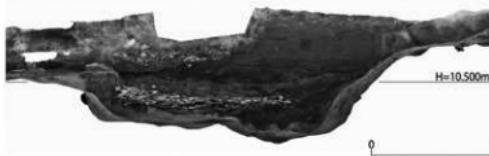
图 5 SX001 石敷遺構 I 区第 3 面・II 区出土状况 3D 俯瞰画像 (1/40)



Ph. 6 SD(SX)001-I 区石敷遺構除去後完掘状況 (1/40)

重かになっていることも予測されたので、これに通常の「手測り」実測を実施すれば、延長した期間での終了も困難と考えられた。そのため、「九州文化財計測支援団体」代表の永見秀徳氏にSFM/MVSによる3次元計測の記録作業の支援を依頼した。永見氏より快諾を得て、石敷構造の記録や調査区土層断面図作成のための3次元画像の撮影・解析・3Dモデルの

作成について全面的にご協力いただいた。それ以外の部分は從来からの実測法を併用した。そのようにして、なんとかⅠ区の調査を終了したのが12月18日で、重機によるⅠ区の埋戻しとⅡ区の表土掘削の防雪掘削作業は12月19日であった。12月21日よりⅡ区の作業を開始したが、Ⅱ区では懸念されたSD002のような未知の大きな溝が東西に



Ph.7 SD(SX)001-I 区3D立面見通し画像モデル (Y=-1 から北側見通し) (1/40)

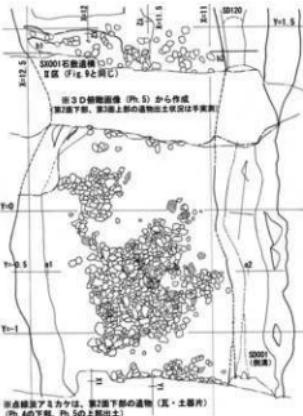


Fig. 11 SX001 石數遺構 I 区第 3 面・II 区出土状況 1/40

表7 SD(SX)001-I区南壁中央~西侧土质

表 8. SD(SX) 001-II 区南壁土層
(Fig. 8) 説明 (1)

走行することもなく、また SD(SX)001 も石敷構造部分が II 区に入った部分で薄くなり

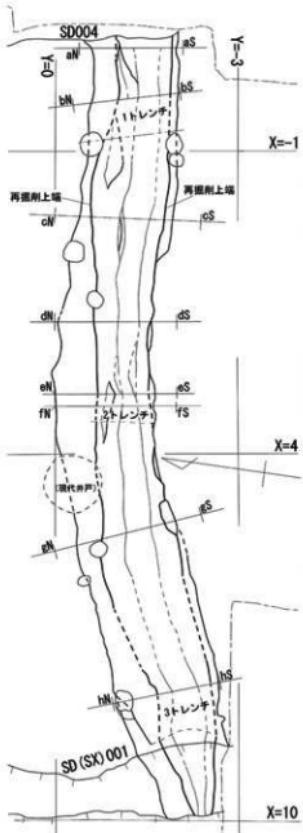


Fig. 12 SD002 再掘削溝平面図 (1/80)

北側に広がらず、I 区のように何面もの記録作業を繰り返す必要はなかった。それでもギリギリの調査工程であり、年末や 1 月前半の積雪の日も作業を行って、なんとか 1 月 15 日に発掘調査を終了した。

井戸 B47 次調査における検出遺構は、溝状遺構 8（または 9）、石敷構造 1、落込み遺構 2、道路遺構（？）1、土坑 1（溝か？）、堅穴住居 2（または 3）、掘立柱建物 8、痕跡構造 2、ピット（柱穴など）多数である。比較的大きな溝状遺構が 4 条あった。なお検出遺構は、ほぼ全ての遺構について検出時の土色などの覆土の特徴をメモして記録しており（ほぼすべてのピットを含む）、これにより掘立柱建物の復元や、出土遺物に乏しい遺構のおよその時期比定に有用となっている。

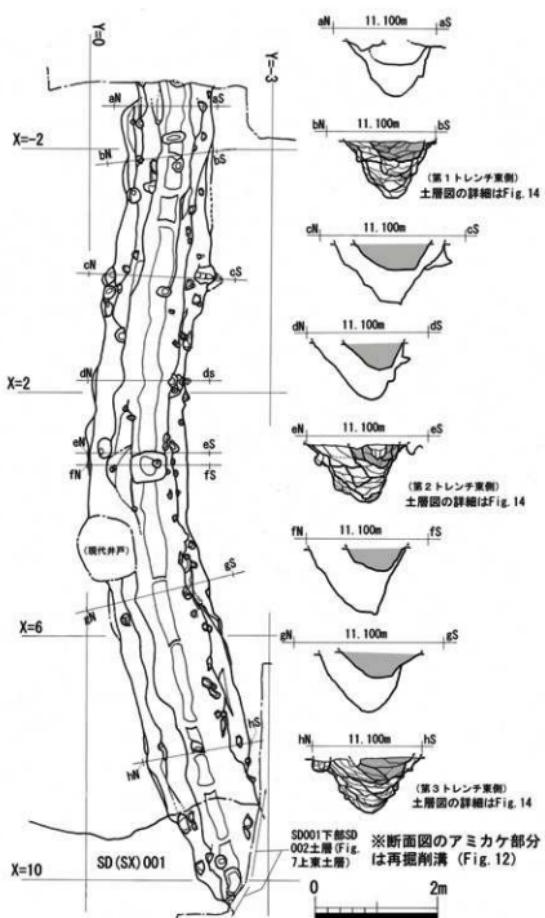


Fig. 13 SD002 完掘状況平面図および断面図 (1/80)

(表 9 の続き)

28. (二) 黄褐色地質質・地盤

29. (二) 黄褐色地質質・地盤

30. (二) 黄褐色地質質・地盤

31. (二) 黄褐色地質質・地盤

32. (二) 黄褐色地質質・地盤

33. (二) 黄褐色地質質・地盤

34. (二) 黄褐色地質質・地盤

35. (二) 黄褐色地質質・地盤

36. (二) 黄褐色地質質・地盤

37. (二) 黄褐色地質質・地盤

38. (二) 黄褐色地質質・地盤

39. (二) 黄褐色地質質・地盤

40. (二) 黄褐色地質質・地盤

41. (二) 黄褐色地質質・地盤

42. (二) 黄褐色地質質・地盤

43. (二) 黄褐色地質質・地盤

44. (二) 黄褐色地質質・地盤

45. (二) 黄褐色地質質・地盤

46. (二) 黄褐色地質質・地盤

47. (二) 黄褐色地質質・地盤

48. (二) 黄褐色地質質・地盤

49. (二) 黄褐色地質質・地盤

50. (二) 黄褐色地質質・地盤

51. (二) 黄褐色地質質・地盤

52. (二) 黄褐色地質質・地盤

53. (二) 黄褐色地質質・地盤

54. (二) 黄褐色地質質・地盤

55. (二) 黄褐色地質質・地盤

56. (二) 黄褐色地質質・地盤

57. (二) 黄褐色地質質・地盤

58. (二) 黄褐色地質質・地盤

59. (二) 黄褐色地質質・地盤

60. (二) 黄褐色地質質・地盤

61. (二) 黄褐色地質質・地盤

62. (二) 黄褐色地質質・地盤

63. (二) 黄褐色地質質・地盤

64. (二) 黄褐色地質質・地盤

65. (二) 黄褐色地質質・地盤

66. (二) 黄褐色地質質・地盤

67. (二) 黄褐色地質質・地盤

68. (二) 黄褐色地質質・地盤

69. (二) 黄褐色地質質・地盤

70. (二) 黄褐色地質質・地盤

71. (二) 黄褐色地質質・地盤

72. (二) 黄褐色地質質・地盤

73. (二) 黄褐色地質質・地盤

74. (二) 黄褐色地質質・地盤

75. (二) 黄褐色地質質・地盤

76. (二) 黄褐色地質質・地盤

77. (二) 黄褐色地質質・地盤

78. (二) 黄褐色地質質・地盤

79. (二) 黄褐色地質質・地盤

80. (二) 黄褐色地質質・地盤

81. (二) 黄褐色地質質・地盤

82. (二) 黄褐色地質質・地盤

83. (二) 黄褐色地質質・地盤

84. (二) 黄褐色地質質・地盤

85. (二) 黄褐色地質質・地盤

86. (二) 黄褐色地質質・地盤

87. (二) 黄褐色地質質・地盤

88. (二) 黄褐色地質質・地盤

89. (二) 黄褐色地質質・地盤

90. (二) 黄褐色地質質・地盤

91. (二) 黄褐色地質質・地盤

92. (二) 黄褐色地質質・地盤

93. (二) 黄褐色地質質・地盤

94. (二) 黄褐色地質質・地盤

95. (二) 黄褐色地質質・地盤

96. (二) 黄褐色地質質・地盤

97. (二) 黄褐色地質質・地盤

98. (二) 黄褐色地質質・地盤

99. (二) 黄褐色地質質・地盤

100. (二) 黄褐色地質質・地盤

101. (二) 黄褐色地質質・地盤

102. (二) 黄褐色地質質・地盤

103. (二) 黄褐色地質質・地盤

104. (二) 黄褐色地質質・地盤

105. (二) 黄褐色地質質・地盤

106. (二) 黄褐色地質質・地盤

107. (二) 黄褐色地質質・地盤

108. (二) 黄褐色地質質・地盤

109. (二) 黄褐色地質質・地盤

110. (二) 黄褐色地質質・地盤

111. (二) 黄褐色地質質・地盤

112. (二) 黄褐色地質質・地盤

113. (二) 黄褐色地質質・地盤

114. (二) 黄褐色地質質・地盤

115. (二) 黄褐色地質質・地盤

116. (二) 黄褐色地質質・地盤

117. (二) 黄褐色地質質・地盤

118. (二) 黄褐色地質質・地盤

119. (二) 黄褐色地質質・地盤

120. (二) 黄褐色地質質・地盤

121. (二) 黄褐色地質質・地盤

122. (二) 黄褐色地質質・地盤

123. (二) 黄褐色地質質・地盤

124. (二) 黄褐色地質質・地盤

125. (二) 黄褐色地質質・地盤

126. (二) 黄褐色地質質・地盤

127. (二) 黄褐色地質質・地盤

128. (二) 黄褐色地質質・地盤

129. (二) 黄褐色地質質・地盤

130. (二) 黄褐色地質質・地盤

131. (二) 黄褐色地質質・地盤

132. (二) 黄褐色地質質・地盤

133. (二) 黄褐色地質質・地盤

134. (二) 黄褐色地質質・地盤

135. (二) 黄褐色地質質・地盤

136. (二) 黄褐色地質質・地盤

137. (二) 黄褐色地質質・地盤

138. (二) 黄褐色地質質・地盤

139. (二) 黄褐色地質質・地盤

140. (二) 黄褐色地質質・地盤

141. (二) 黄褐色地質質・地盤

142. (二) 黄褐色地質質・地盤

143. (二) 黄褐色地質質・地盤

144. (二) 黄褐色地質質・地盤

145. (二) 黄褐色地質質・地盤

146. (二) 黄褐色地質質・地盤

147. (二) 黄褐色地質質・地盤

148. (二) 黄褐色地質質・地盤

149. (二) 黄褐色地質質・地盤

150. (二) 黄褐色地質質・地盤

151. (二) 黄褐色地質質・地盤

152. (二) 黄褐色地質質・地盤

153. (二) 黄褐色地質質・地盤

154. (二) 黄褐色地質質・地盤

155. (二) 黄褐色地質質・地盤

156. (二) 黄褐色地質質・地盤

157. (二) 黄褐色地質質・地盤

158. (二) 黄褐色地質質・地盤

159. (二) 黄褐色地質質・地盤

160. (二) 黄褐色地質質・地盤

161. (二) 黄褐色地質質・地盤

162. (二) 黄褐色地質質・地盤

163. (二) 黄褐色地質質・地盤

164. (二) 黄褐色地質質・地盤

165. (二) 黄褐色地質質・地盤

166. (二) 黄褐色地質質・地盤

167. (二) 黄褐色地質質・地盤

168. (二) 黄褐色地質質・地盤

169. (二) 黄褐色地質質・地盤

170. (二) 黄褐色地質質・地盤

171. (二) 黄褐色地質質・地盤

172. (二) 黄褐色地質質・地盤

173. (二) 黄褐色地質質・地盤

174. (二) 黄褐色地質質・地盤

175. (二) 黄褐色地質質・地盤

176. (二) 黄褐色地質質・地盤

177. (二) 黄褐色地質質・地盤

178. (二) 黄褐色地質質・地盤

179. (二) 黄褐色地質質・地盤

180. (二) 黄褐色地質質・地盤

181. (二) 黄褐色地質質・地盤

182. (二) 黄褐色地質質・地盤

183. (二) 黄褐色地質質・地盤

184. (二) 黄褐色地質質・地盤

185. (二) 黄褐色地質質・地盤

186. (二) 黄褐色地質質・地盤

187. (二) 黄褐色地質質・地盤

188. (二) 黄褐色地質質・地盤

189. (二) 黄褐色地質質・地盤

190. (二) 黄褐色地質質・地盤

191. (二) 黄褐色地質質・地盤

192. (二) 黄褐色地質質・地盤

193. (二) 黄褐色地質質・地盤

194. (二) 黄褐色地質質・地盤

195. (二) 黄褐色地質質・地盤

196. (二) 黄褐色地質質・地盤

197. (二) 黄褐色地質質・地盤

198. (二) 黄褐色地質質・地盤

199. (二) 黄褐色地質質・地盤

200. (二) 黄褐色地質質・地盤

201. (二) 黄褐色地質質・地盤

202. (二) 黄褐色地質質・地盤

203. (二) 黄褐色地質質・地盤

204. (二) 黄褐色地質質・地盤

205. (二) 黄褐色地質質・地盤

206. (二) 黄褐色地質質・地盤

207. (二) 黄褐色地質質・地盤

208. (二) 黄褐色地質質・地盤

209. (二) 黄褐色地質質・地盤

210. (二) 黄褐色地質質・地盤

211. (二) 黄褐色地質質・地盤

212. (二) 黄褐色地質質・地盤

213. (二) 黄褐色地質質・地盤

214. (二) 黄褐色地質質・地盤

215. (二) 黄褐色地質質・地盤

216. (二) 黄褐色地質質・地盤

217. (二) 黄褐色地質質・地盤

218. (二) 黄褐色地質質・地盤

219. (二) 黄褐色地質質・地盤

220. (二) 黄褐色地質質・地盤

221. (二) 黄褐色地質質・地盤

222. (二) 黄褐色地質質・地盤

223. (二) 黄褐色地質質・地盤

224. (二) 黄褐色地質質・地盤

225. (二) 黄褐色地質質・地盤

226. (二) 黄褐色地質質・地盤

227. (二) 黄褐色地質質・地盤

228. (二) 黄褐色地質質・地盤

229. (二) 黄褐色地質質・地盤

230. (二) 黄褐色地質質・地盤

231. (二) 黄褐色地質質・地盤

232. (二) 黄褐色地質質・地盤

233. (二) 黄褐色地質質・地盤

234. (二) 黄褐色地質質・地盤

235. (二) 黄褐色地質質・地盤

236. (二) 黄褐色地質質・地盤

237. (二) 黄褐色地質質・地盤

238. (二) 黄褐色地質質・地盤

239. (二) 黄褐色地質質・地盤

240. (二) 黄褐色地質質・地盤

241. (二) 黄褐色地質質・地盤

242. (二) 黄褐色地質質・地盤

243. (二) 黄褐色地質質・地盤

244. (二) 黄褐色地質質・地盤

245. (二) 黄褐色地質質・地盤

246. (二) 黄褐色地質質・地盤

247. (二) 黄褐色地質質・地盤

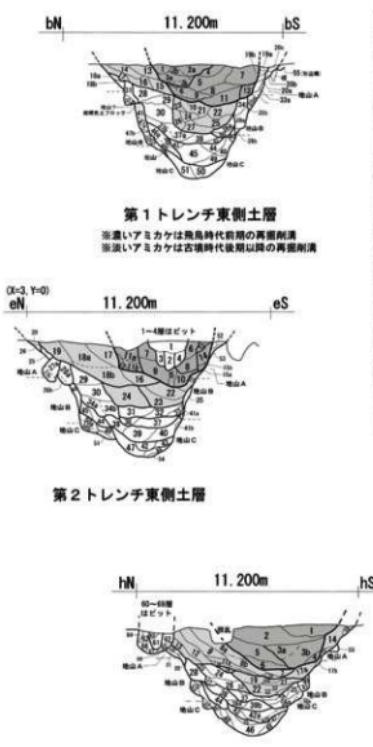


Fig. 14 SD002 各トレンチ土層断面図 (1/40)

1. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
2. 耕地の耕作地帯は、耕地面積の 10%～
15% + 上土子 1～2% = 45% が好い。
3. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
4. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
5. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
6. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
7. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
8. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
9. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
10. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
11. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
12. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
13. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
14. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
15. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
16. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
17. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
18. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
19. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。
20. 総耕地面積は、耕地面積の 10%～15%
+上土子 1～2% = 45% が好い。

表10 SP002-第1トレンチ土層(Fig.14上)説明(1)

表 11. SD002-第1トレンチ土層 (Fig. 14 上) 説明 (2)

表 12 SPM02-第2トレンチ土層 (Fig. 14 由) 説明

出土遺物は、総量パンケース11箱前後で、繩文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、古代瓦・中世国産陶器、中世輸入陶磁器、石器、ガラス管玉、鉄器がある。特筆すべき遺物としては、SN001石敷構造に埋め込まれた多数の飛鳥時代末～奈良時代初頭の古代瓦片があり、「尻井廐寺」とは距離があるが、関連施設が遺跡北端にあった可能性が出てきた。ガラス管玉は質材などから飛鳥時代と思われ、類例が少ない貴重な事例である。そ

の他出土遺構は不明確だが、弥生時代中期前半以前とみられる安山岩の石器が数点があった。

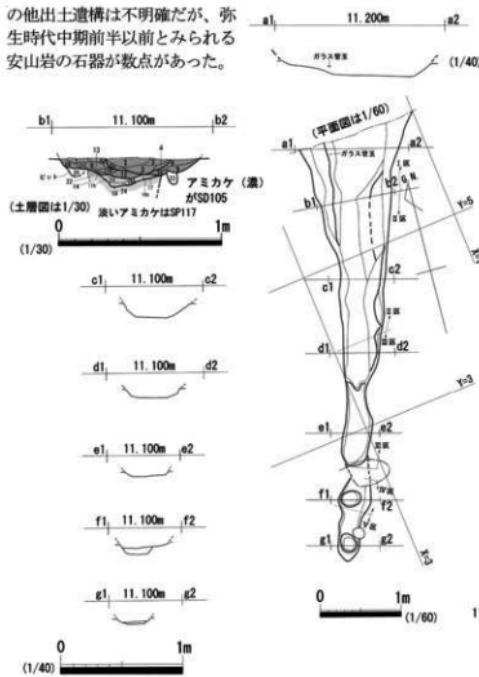


Fig. 16 SD105 平面図 (1/60)・断面図 (1/40)・土層図 (1/30)

表 15. SD004 土層 (Fig. 15 下) 說明 (2)

また少数ながら弥生時代前期から中期初頭の土器片があり、上記の石器類の時期に関連する可能性があるう。

3 檢出遺擱

以下、SD(SK001 溝状遺構・落込み遺構 (SX111 を含む)・石敷遺構、その他の溝状遺構 (SD)・土坑など (SK, SX)・炉跡遺構 (SX)・竪穴住居 (SC)・掘立柱建物 (SB) の順で遺構を報告するが、挿図や写真を多く掲載したため (特に SK001 石敷遺構は複数面があり、かつ3次元計測記録を図化表現するために図が増加し、紙幅が不足したので各遺構の説明文は簡潔に記すが、掲載図には詳細な説明を入れ、また各遺構の土層断面の記録に力を入れ、その土層説明の提示はほぼ現場記録のま



表 16. SK(SD)106・SD107 土層
(Fig. 15 上・Fig. 17) 説明 (1)

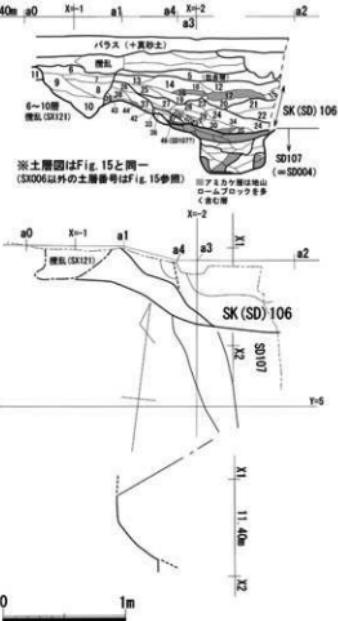


Fig. 17 SK106 平面図・(土層)断面図 (1/40)

〔表 16 ～20 種〕
 1. 地盤の構成層は、地盤の上部に土層、中間に砂層、下部に粘土層である。
 2. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 3. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 4. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 5. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 6. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 7. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 8. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 9. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 10. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 11. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 12. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 13. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 14. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 15. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 16. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 17. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 18. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 19. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 20. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 21. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 22. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 23. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 24. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 25. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 26. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 27. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 28. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 29. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 30. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 31. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 32. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 33. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 34. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 35. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 36. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 37. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 38. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 39. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 40. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 41. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 42. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 43. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 44. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 45. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 46. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 47. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 48. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 49. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。
 50. 地盤の構成層は、地盤の上部に砂層、中間に粘土層、下部に砂層である。

表 17. SK(SD)106・SD107 土層
 (Fig. 15 上～Fig. 17) 説明 (2)

遺構」とした。I 区側を「SD(SX001-I 区)」、II 区側を「SD(SX001-II 区)」とした。I 区では SD(SX001-I 区) と連続して一体のものとも解釈できるが、土層の観察では (Fig. 5)、SX11 埋没後に SD(SX001) が形成されたとも解釈できる。調査進行過程で遺構の把握や遺構番号や名称の混涇が若干ある。II 区では石敷遺構より下層の印込みを「SX131」としたが、I 区では特に番号を付しておらず、SX001 石敷遺構機能時の同時存在と想定される東側の「側溝」は I 区側では単に「側溝」としたが、II 区側では「SD120」とした。また I 区での SD(SX001) 上層掘削時当初には、その「側溝」部分を含む中央から東側を、「側溝」部分に向かって落ち込む新しい中世の溝と考え(すでに石敷遺構に古代瓦が含まれることを確認して下層遺構を古代の遺構と考えたため)、「SD001-B」として下層と分離して掘削して遺物も分離したが、途中でそれは誤りだと認識して掘削層位分離を修正している。土層を検討すると (Fig. 5～8)、やや微妙な部分もあるが、石敷層が上面である時期に東側に「側溝」部分が存

※「G.N.」は国土標準基準

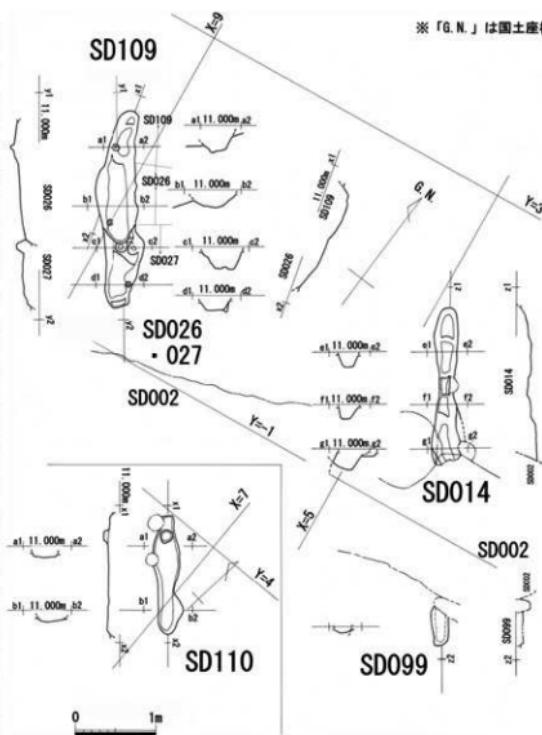


Fig. 18 SD026-027, SD109・SD002, SD099 および SD110 実測図 (1/60)

ま掲載したので、説明に不足するところは少ないのである。

(1) SD(SX001) 溝状構造・落込み構造・石敷構造 (Fig. 5～11, Ph. 3～7, 表式紙真写真、裏表紙写真左列、巻頭図版 2-2.3・3-4.5・4-9.10, PL. 1-1, 3-6, 2-1～4, 表 1～9)

調査区西側で I・II 区にまたがって検出した溝状ないし落込み(凹地状)遺構で、この遺構の下層上部ないし中層にある「石敷遺構」も「SX001 石敷

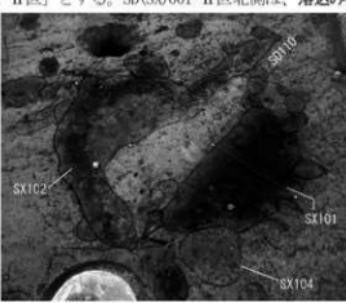


Fig. 18 SX101-I02, SX104 ほか遺構検出状況 (東から)

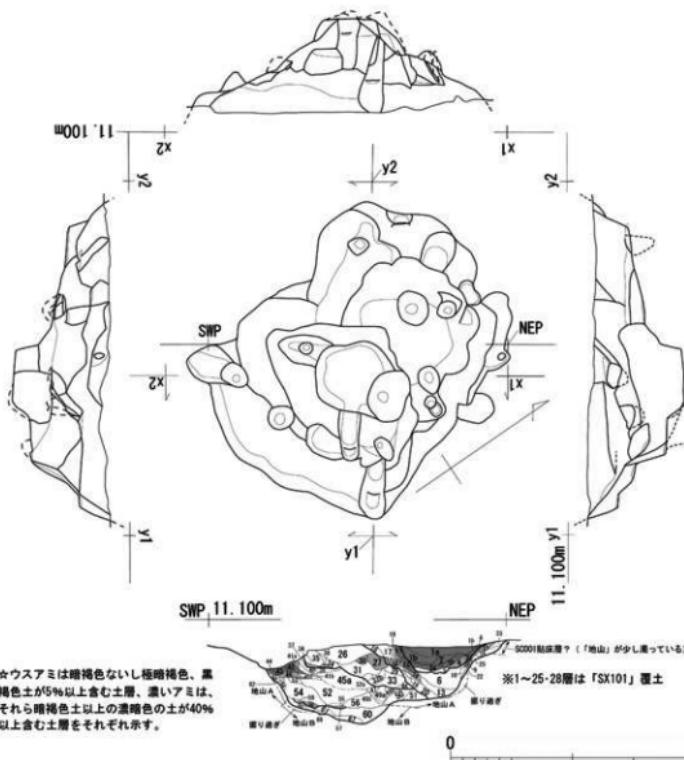


Fig. 19 SX101・102（風倒木痕？）実測図・土層図（1/40）

45a. (2) 例より和性アカリ(一見地山の姫) 58. バハバサとした明鏡色ローム上十枚

表 18. SX101・102
土層説明（1）

在し、また石敷層の上部に「整地層」状の土層が形成される時にも東側に「側溝」が存在したと解釈している。また石敷層の下層に本来の遺構の底面があり、当初は幅広い溝状ないし凹地状の遺構として掘削されたものと考えられる。そのようにしてみると、I 区側 SD(SX-001)下層より II 区側 (SX-131) が若干深くなっていることと、北側に連続する落込み遺構 SX111 はその延長とも解釈する余地があり、そうであれば当初は SD(SX-001) (SX131 を含めた)という可能性も考慮当初から存在した遺構で

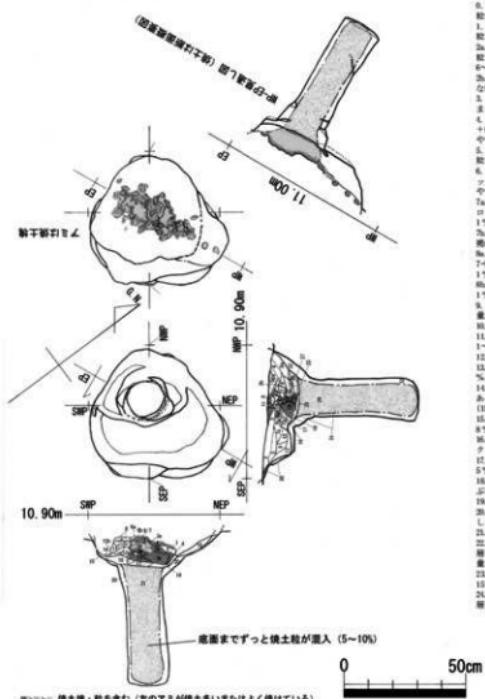


Fig. 20 SX104 特殊炉址実測図・土層図 (1/20)

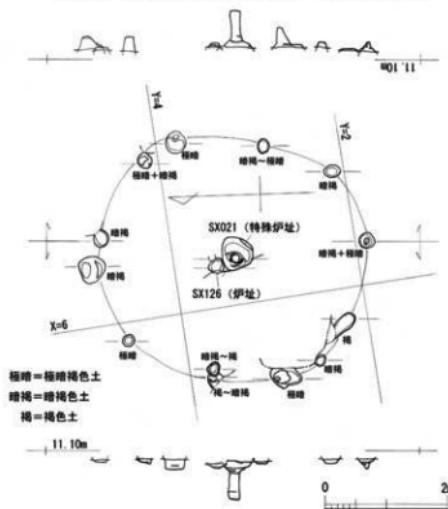


Fig. 21 SC001 円形竪穴住居址実測図 (1/80)

(PER-NMR 本題)

表 20. SX104 爐址土層 (Fig. 19) 說明

はない。当初の溝ないし凹地遺構の下層部分が埋まつた段階で(Fig. 7 土層などを見ると、下層溝に「掘り返し」があるようにも見え、一定期間は「溝」として機能したか)、ある段階で埋まつた部分までを整地し、礫を敷き詰めて積土で覆うという行為がなされたとみられる。この「石敷層(礫層)」は、調査の記録作業上では「4面」あるが(「4面」目は多数の写真を撮影しているが、礫が少いこともあり3Dモデルは作成していない;裏表紙写真左下)、土層を検討する時(Fig. 7)、実質的には2層のみの分離が妥当である。明確に分離できないが、「1・2面」(Fig. 10, Ph. 3-4) 石敷層1層、「3・4面」(「3面」のみ詳細記録; Fig. 11, Ph. 5)が石敷層2層である。なお石敷が薄くなるⅡ区南側は上下両層レベルに隙間に砾があるが、どちらかといと「2層」に多いものの、Ⅰ区からⅡ区にかけてどのように変遷するかについて、反転掘削時に深い構造面までの安全法面を確保する都合から、一部未調査部分が生じてしまいそれが不明になってしまった。また石敷層の礫は花崗岩主体で、河原にあるような中小の円礫、球円礫がほとんどであるが、古代瓦(軒瓦は含まれなかつた)の破片を中心に、弥生土器、古墳時代から中世までの土師器、須恵器、中世の国産陶器の破片が多く一緒に埋め込まれていた。古代瓦片が多く当初は古代の遺構かと疑つたが、備前焼鉢片や土師器小皿などが確実に含

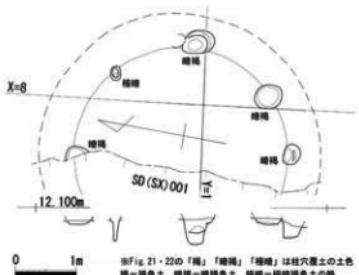


Fig. 22 SC002 実測図 (1/80)

在せず、石敷がII区は南側端までしか続かない点で、延長部分が長い構造という道路の条件を満たしていないことである。もう一つは、落込み遺構SX11は湧水がみられた点や、遺跡北端で段丘が北側で段落ちする可能性を考慮し、これも博多遺跡群に類例があるが、「船着場（波止場）の荷揚場」に関わるような石敷（整地）遺構とする見方である。いずれにせよ、今後47次の北側で調査がある際には、この二つの可能性を考慮した精査が望まれる。なお遺構の幅や深さなどの法量、方位（略南北だが）、土層などは挿図を参照されたい。

(2) その他の溝状構造

・SD002 (Fig. 7上・12~14、裏表紙右上、巻頭図版3-6~8、PL. 1-1, 2・2-5~8、表4-11~13)

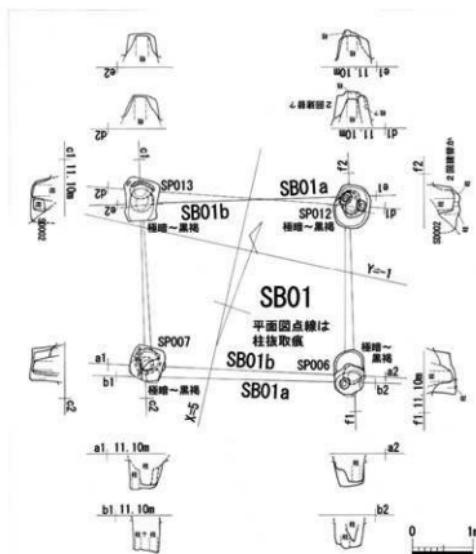


Fig. 23 SB01 実測図 (1/80)

まれ (Fig. 28-1~4など)、少なくとも石敷構造は備前焼IV期の播鉢などから中世後半 (14世紀後半~16世紀前半) の可能性が高く、SD(SX)001の当初の掘削も、「SX131」やSD(SX)001-II区下層またはSX11から出土した土器片器 (Fig. 29-10, 11) から上限は14世紀頃であろう。問題は石敷構造の機能だが、「石敷」といっても粘質土で固められ、土器・瓦・陶器片も一緒に「意図的に」埋め込まれている特徴などは、博多遺跡群などでみられる「道路」構造の路面（路盤）工の一種に類似しており、「道路」とみる解釈が一つある。路面（路盤）が上下に折り重なる形で形成され、片側だが「側溝」があること、またその上部に礫は含まれないが「整地層」らしき水平層群が何面かみられ (Fig. 5・7上)、「路面のかさ上げ」状況に類似することもその解釈を支持するが、問題は南側22次にはこの構造は存在しない。

I区検出の東西に走行する長さ12.8m以上の溝、西側はSD001に切られるが延びるとみられ、東も調査区外に延びる。覆土の特徴は土層図参照。幅は120~170cm、平均150cm前後、検出面からの深さは90~108cm、底面の標高では9.94~10.05mでの凹凸があり東西にどちらかが深いということは不明確だが、中央の断面IN-FS部分がピット状に深く9.86m、溝の断面形はV字とU字形の中間。走行は直線的というよりや蛇行、または中間部分で屈曲し、東側がN-88°E、西側がN-68.5°E、全体ではN-78.5°E。上層部分は断面でも平面でも比較的明確な「掘り返し」溝が分かれ (Fig. 12, Fig. 13-14のアミカケ部分)、この上層溝は飛鳥時代前期頃の遺物があり、その時期の再掘削だが、土層にはそれ以前にも「掘り返し」痕跡とみられる層位の不整合がいくつかあり (Fig. 14)、「中層」に古墳時代後期の遺物があるの、1トレーナー27層より上、2トレーナー23層または24層より上、3トレーナー22層より上は古墳時代後期の再掘削の可能性がある。当初の掘削時期だが、下層出土遺物が少なく不明確だが、青みがある黒褐色に近い土色で、古墳時代前期以前の蓋然性が高く、少しがら弥生時代終末期~古墳初頭の遺物があり、掘削時期を示すと考える。また下層埋土の質から当初は「水路」的な溝であろう。





Ph. 13 SP116 半裁
土層状況（南から）
Ph. 14 SP115 半裁
土層状況（南から）
Ph. 15 SP117 半裁
土層状況（南から）
Ph. 16 SP113 半裁
土層状況（南から）
Ph. 17 SP112 半裁
土層状況（南から）

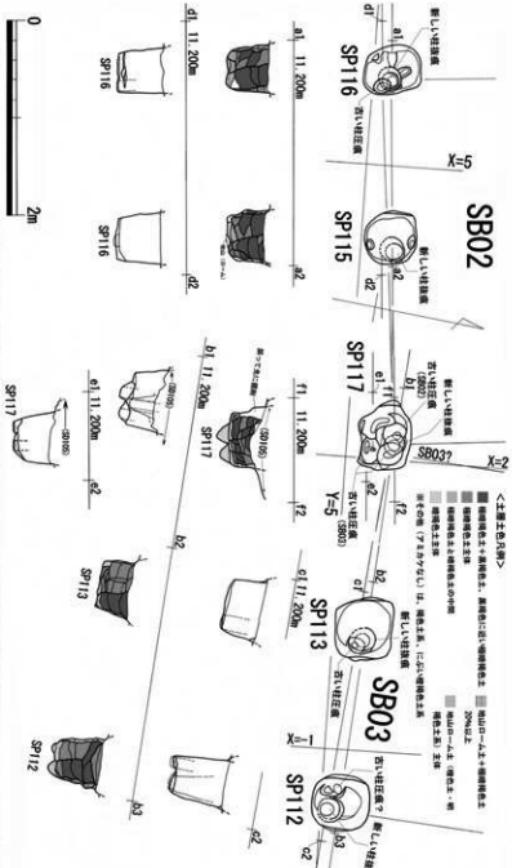


Fig. 24 SB02・SB03 実測図 (1/80)

の土器小皿の出土があるが (Fig. 29-24)、下層は地山ブロック主体で埋戻しされたような土層で異なり、元来の溝の掘削は下層の土色からも古代前半と考える。また検出レベル

での溝幅は推定 110cm (SD004)~150cm 前後 (SD107) で、北側がやや広くなるらしい。

・ SD105 (Fig. 16、巻頭図版 4-14、PL. 3-2, 6, 7、土層説明表は省略)

II 区検出の、方位 N-16° -E の浅い溝。北側が広く幅 140cm 前後で、深さも北半では 12~14 cm だが、南に向かつて細く、浅くなり、消失してしまう。上層は暗褐色土で、古代前半遺構に一般的な覆土。ただし時期を決める遺物に乏しい。溝北側上層でガラス管玉 (巻頭図版 4-20-1~3、PL. 3-14-1~5、Fig. 29-39) 片が出土。濃紺色で、端面に研磨痕があり、孔径が身に比して広く、内面には冷却時 (?) の皺があり、石英粒を噛みこむ。比佐陽一郎の分析・教示によるとソーダ石灰ガラス系だが、コバルト着色で不純物 (?) として鉄分とマンガンを含み、色調、形状 (孔径など)、成分など確実な類例に乏しいが、飛鳥時代前後の可能性があるという (文責は編集者)。溝が正方位ではないので、飛鳥時代末期の井戸 B 遺跡の遺構群の展開に先行する溝と推測するが、ガラス管玉もその時期であろう。

・ SD109・SD026・027、SD014・SD099 (Fig. 18、PL. 3-3~5)

並列しそうな細い小溝群である。SD026 と SD109 (SD001-II 区の下部) は同一溝 (区で番号が別)、また SD026 は SD 027 を切るが、「掘り返し」であろう。方位 N-33° -W、ピット状部分を除き SD027 は深さ 10cm、SD026・109 は 12~20 cm。いずれも極暗褐色土。SD014 も極暗褐色覆土の溝で、方位 N-36.5° -W、深さは南側 20 cm、北側 12 cm だが北に

・ SD (SX) 003 (Fig. 4-5、巻頭図版 3-4、PL. 1-1-2-9, 10、表 2-3)

調査区西端で検出した溝状遺構だが、遺構の西端は調査区外。「基本土層」でみたように、検出レベルは低くなっている、元々谷状地形に掘削された遺構か。土層を検討すると、SD (SX) 001 の上部層を切るような落ち込みが上部からみられ (Fig. 5)、近世まで下るかもしれない。SX としたのは、II 区底面で「波板状構造」状の凹凸があり、溝ではなく「道路 (切通し)」の可能性があるためである。また、ややズレがあるが 22 次 SD01 の延長だろう。

・ SD004・107 (Fig. 15、巻頭図版 4-11, 12、PL. 2-11, 12・3-1、表 14~17)

調査区東端検出の溝。I 区側が SD004、II 区側が SD107 の同一溝。SD004 を切り、SK006 より古い。およそ直線的で、N-11.5° -W の方位だが、北側は西にやや振れる。中層に中世前半

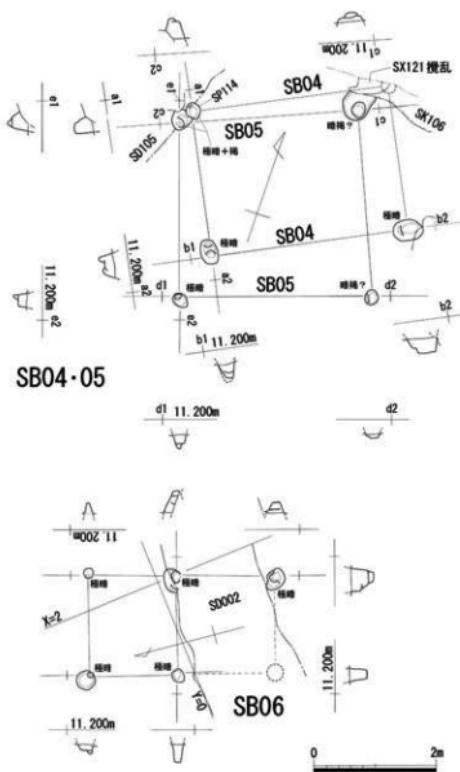


Fig. 25 SB04-05, SB06 実測図 (1/80)

の土器器鉢などが出土し (Fig. 29-23)、中世の遺構だろう。

・SX005 (Fig. 4)

SD002 東側の上層を切るような楕円形状の凹み。深さは 10cm 程度で、プランや底面に不明瞭なところがあったため、「土坑」かどうか不明確。褐色～暗褐色土で、遺構とすれば中世だろう。

・SX101-102 (Fig. 19, Ph. 8、巻頭図版 13, PL. 3-12, 13, 表 18, 19)

当初は複数の土坑などの重複と考えたが、検出面の極暗褐色土 (Ph. 8) が下に入り込み、「地山」主体覆土と逆転しており、土層の特徴から「風倒木痕」の可能性が高い。土層観察によると、あるいは二つの風倒木痕の重複の可能性もある。遺物も上面・上層にわずかにあるがほとんど出土しない。ただし黒褐色～極暗褐色土覆土は弥生時代～古墳時代前期遺構のそれとほぼ同じであるとの、SC001 の貼床層を切る可能性があることから、弥生時代に形成された可能性がある。問題は炉址 SX104 との切合いだが、実際は接していないだけでは直接の切合いは不明とした方が正しいと思われ、もう一つの炉址 SX126 は確実に切っている。

・SX104 (Fig. 20, Ph. 8、巻頭図版 4-15～19, PL. 3-11, 表 20)

II 区中央で検出した、焼土塊が主体の覆土の炉址状遺構で、平面 55×55cm の不整円形ないし隅円三角形、上部土坑は深さ 14cm だ

に立ち上がって浅くなり消失する。SD002 を切られるので弥生時代終末期以前だろう。SD002 を挟んで同一線上の南に非常に深い SD099 がある。同一溝と推定する。いずれの溝も削平により南北が失われていると考える。両溝（群）は芯々 4.1m 前後である。今後の周囲調査に期待するが、「道路」遺構の可能性を秘める。

・SD110 (Fig. 18, Ph. 8)

SD101-102 を切る長さ 1.45m の小溝。極暗褐色土+褐色土、方位は N 46°W。かなり深い小溝であり、あるいは方形竪穴住居壁周溝の一部遺存などかもしれない。

(3) 土坑など

・SK (SD) 106 (Fig. 17、巻頭図版 4-12、表 16-17)

SD107 を切ると判断した土坑だが溝の可能性もある。下部に SD107 があるが、地山ブロック埋戻し層は SD107 と考え、この上を SK106 とした (Fig. 15 上)。暗褐色～褐色土覆土で、中世

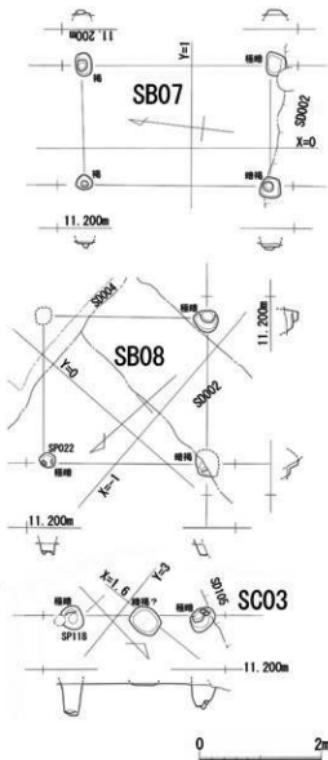


Fig. 26 SB07, SB08 および SC03 実測図 (1/80)

が、下部は細いピット状となり深さ63cmとなった。上部土坑では中央に断面山形状の焼土塊主体層があり、下部ピットには10%未満だが焼土粒が含まれた。通常の炉址とは異なると考え、調査も上部は四分法を用い慎重に調査したが、たとえば鍛造剝片のような遺物は検出していない。それでも何か金属器生産に関係する遺構の可能性を考える。おそらくSC001の中央炉である。もう一つ、接してより古く小さな炉址SX126(PL. 3-10)があつたが、焼土はそれほど多くなかった。

(4) 穹穴住居

S001 (Fig. 21) は、**SX104** 炉址を中心とする円形住居があると考え図上復元したもの。柱列は 4.0×4.6 m で正方形ではない。壁は残らず、本来は一回り大きいだろう。この範囲の「地山」は何か汚れた感じで、貼床層が一部未削削の可能性がある。**SX101・102** 上層遺物が **S001** に伴う可能性があり、弥生時代中期か。**S002** (Fig. 22) は柱列の径 $3.5 \sim 3.6$ m の小型円形住居と推定したもの。壁は削平される。**S003** (Fig. 26 下) は、弥生時代後期以降の**二本柱主柱方形竪穴住居**の削平と考えたもの。柱間 2.1 m、方位 N 46° W。

(5) 据立柱建物

SB001 (Fig. 23, Ph. 9~12, PL. 3-9) は、覆土や SD002 との切合いから弥生時代と考えられる 1×1 間の建物。SB01a (N 69° E) が SB01b (N 75° -

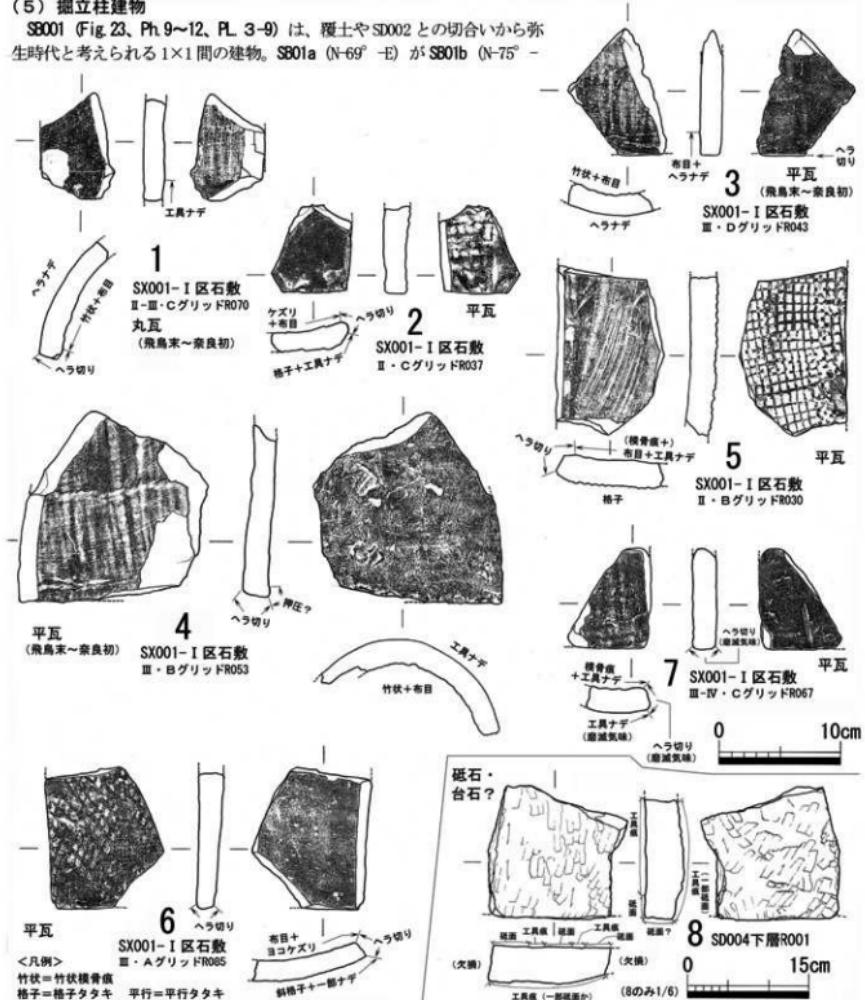


Fig. 27 井尻B47 次出土遺物実測図（1）(1/4, 8のみ 1/6)

-Ⅲ)を切るが建替だろ。SP006・007に弥生中期土器片(Fig. 29-28, 30)、SP013に古式土師器片がある(Fig. 29-29)。SD002との関係から前者の時期か。SB02・SB03(Fig. 24, Ph. 13~17, P.L. 3-2、土層図は省略した)はそれぞれ推定桁行2間の建物。柱筋が微妙に異なり(02はN-79°-E, 03はN-89°-E)、別棟だがSP117を共有し、建替か。SP113-116に古式土師器片があり(Fig. 29-32, 33)、古墳前期。SB04・SB05(Fig. 25上)はいずれも1×1間の



Fig. 28 井尻B47 次出土遺物実測図(2) (1/4, 22のみ1/2)

建物。SB04 が新しいが SK106 に切られる。SB04 が N-63° E、SB05 が N-68° E で近い方位。弥生時代～古墳前期か。SB06 (Fig. 26 下) は SD002 に切られる 1×2 間の建物。N-15° W、切合いで柱穴覆土から弥生時代か。SB07 (Fig. 26 上) は SD002 を切る 1×1 間の建物。N-7° W。おそらく古代の遺構。SB08 (Fig. 26 中) は SD002 に切られる 1×1 間の建物。N-42° E。弥生時代か。※以下紙幅が無く、出土遺物 (Fig. 27~29) は記述できない。ご寛恕を請う。

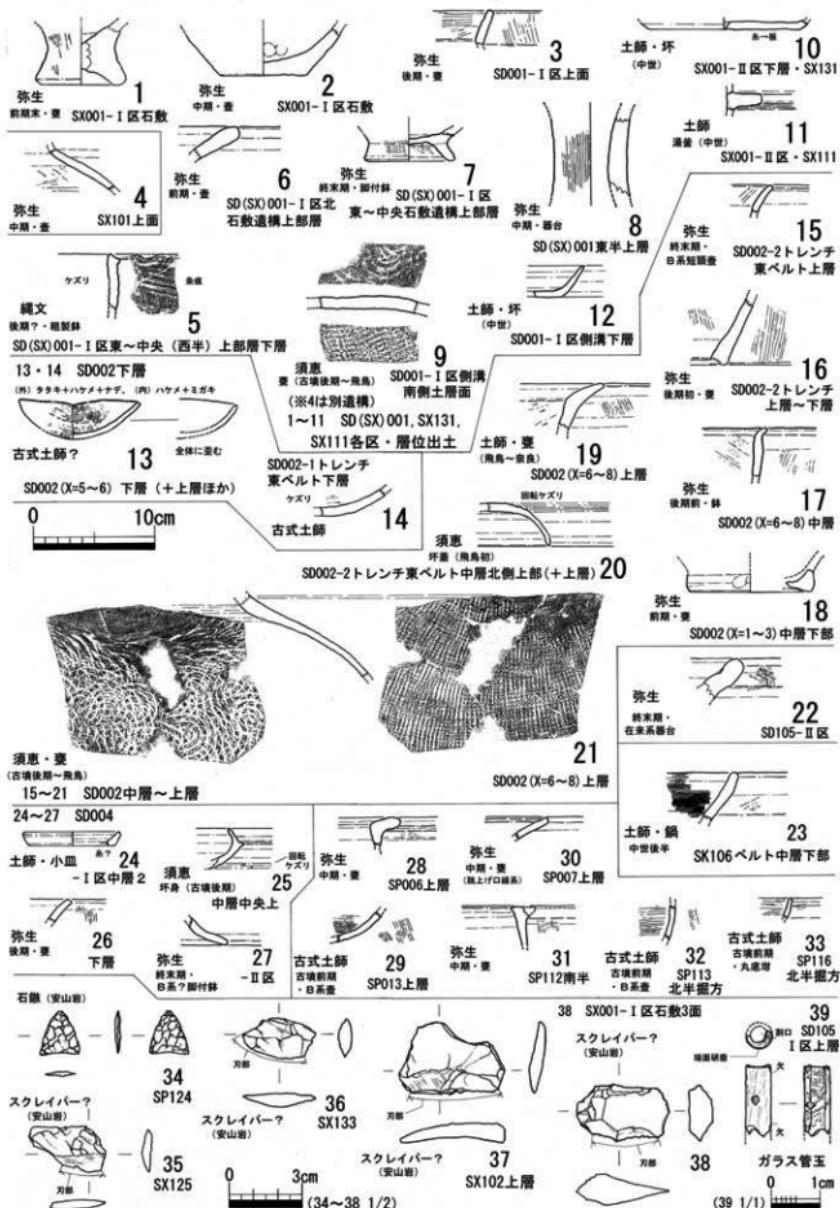


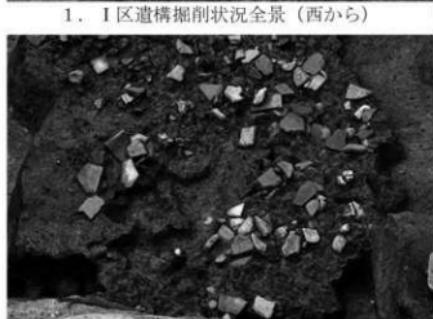
Fig. 29 井戸B47 次出土遺物実測図 (3) (1/4, 石器は 1/2, ガラス管玉は 1/1)



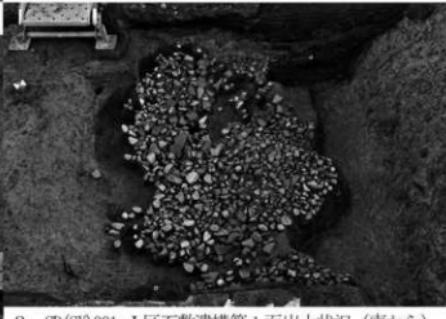
1. I 区遺構掘削状況全景（西から）



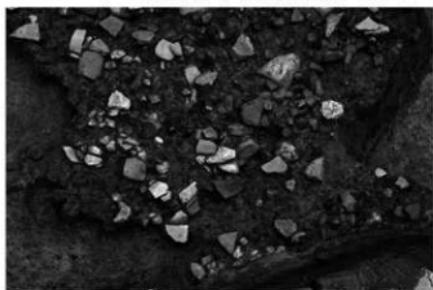
2. SD002 (I 区全景撮影時) 掘削状況（西から）



4. SX001-I 区石敷遺構第2面出土状況近景（北から）



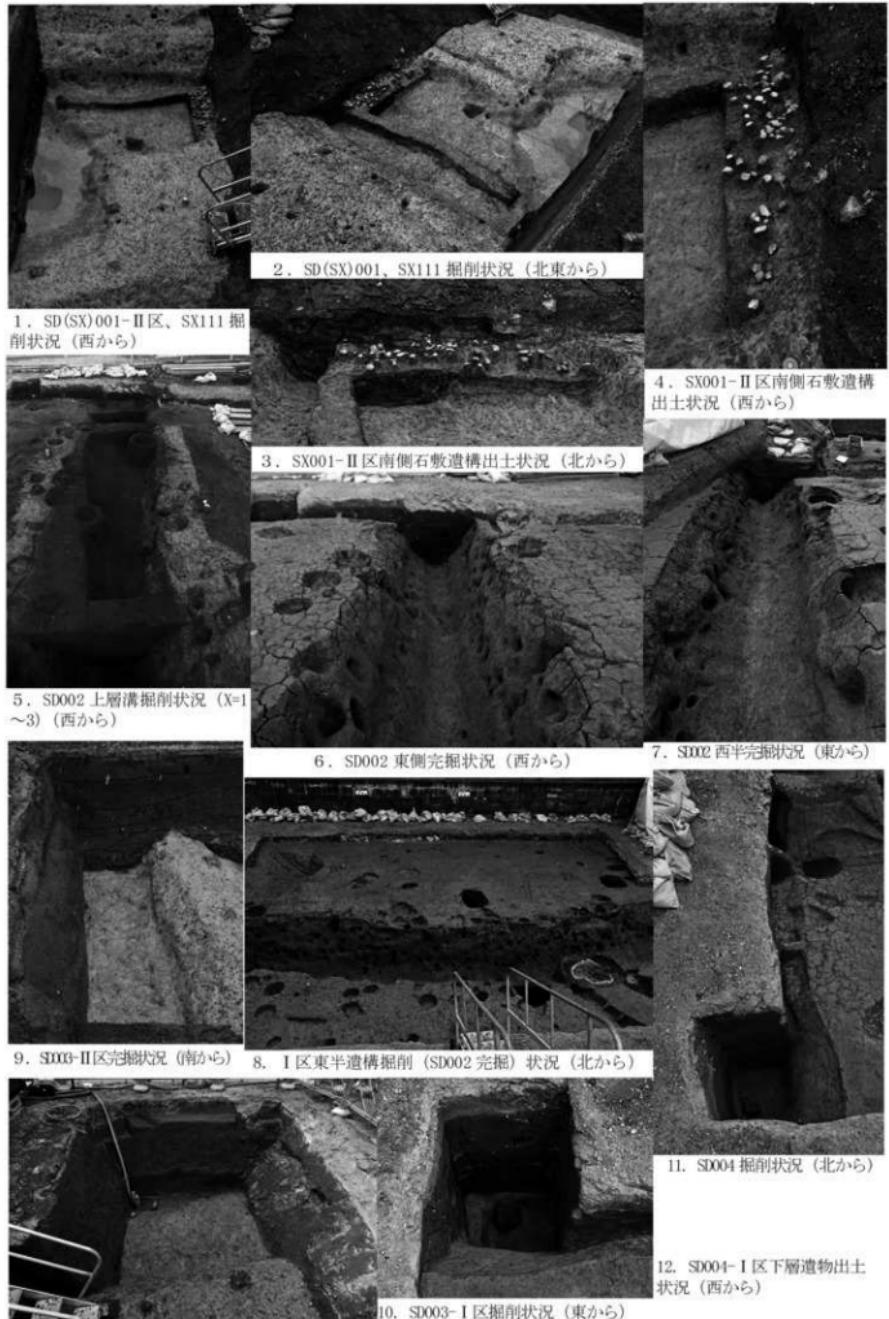
3. SD(SX001-I 区石敷遺構第1面出土状況（南から）

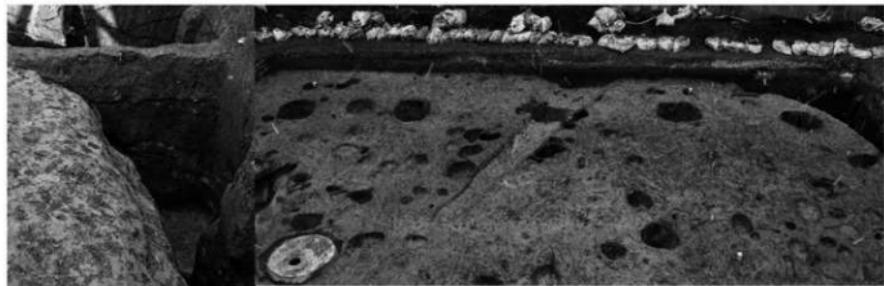


5. SX001-I 区石敷遺構第2面出土状況近景（南西から）

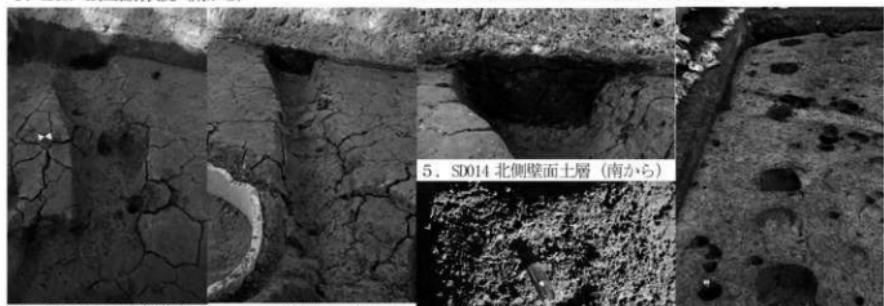
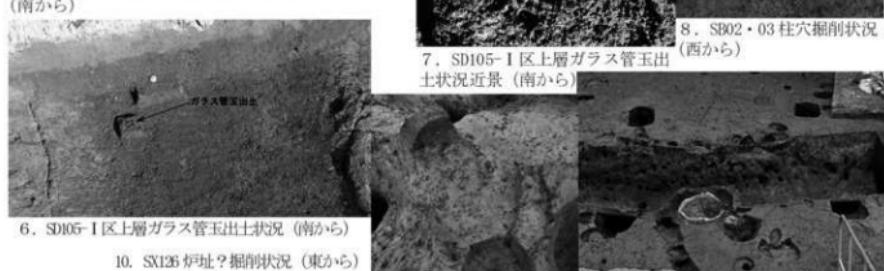


6. SX001-I 区完側状況（東から）

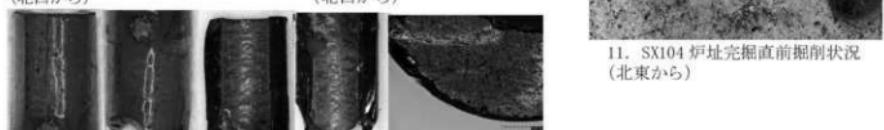
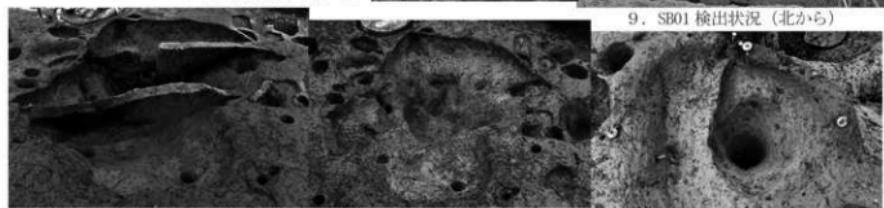




2. SD105, SB02・03 掘削状況（南から）

8. SB02・03 柱穴掘削状況
(西から)

9. SB01 検出状況（北から）



報告書抄録

ふりがな	いじりびーいせき29ーいじりびーいせきだい47じちょうさのはうこくー
書名	井尻B遺跡29
副書名	一井尻B遺跡第47次調査の報告ー
卷次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1439
編著者名	久住猛輝
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2022年3月24日

遺跡名ふりがな	いじりびーいせきだい47じちょうさ
遺跡名	井尻B遺跡第47調査
所在地ふりがな	ふくおかしみなみくいじり1ちょうめ735ばん9
遺跡所在地	福岡市南区井尻1丁目735番9
市町村コード	40134
遺跡番号	0090
北緯	33度33分26秒 (世界測地系)
東経	130度26分27秒 (世界測地系)
調査期間	2020.11.10~2021.10.15
調査面積 (m ²)	216.39m ²
調査原因	住宅建設工事

種別	土な時代	土な遺構	土な遺物	特記事項
集落	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代	溝状遺構、石敷遺構、落込み遺構、道路(?)遺構、堅穴住居、炉址遺構、柱穴、掘立柱建物、風呂木痕(?)	縄文土器、弥生土器、古式土器、土師器、土器、須恵器、古代瓦、中世産陶器、中世輸入陶器、石器、ガラス管、鐵器	遺構には比較的大きな溝が4条あった。調査区西端の南北溝 SD003は中世以降で南側の22次 SD01の範囲とみられるが、底面の一部に板状遺構があり切通し道路の可能性がある。その東側の南北溝 SD001(落込み遺構・石敷遺構 SD001と同一)は、下層の一定の大きさに石敷遺構 SD001があった。縁に沿って古代瓦片が多く含まれるが、中世の土器・陶磁器も混じり、中世後半である。遺構の性格は不明確であるが、可能性として道路遺構の路(路面)工、あるいは船着場(?)に付随するような石製の荷揚場遺構(博多港跡に類似あり)などが考えられる。SD002は SD001に接される東西溝で、やや蛇行する。古墳時代後期および飛鳥時代に再削削されているが、下層の遺物や埋土から本家の削削時期は奈良時代終末期であろう。SD004・107は調査区北端の南北溝で、SD002を切る中世の溝であるが、これらも当初の掘削は飛鳥時代の可能性がある。SD005は古墳時代後期～飛鳥時代で、ガラス管玉の出土があった。耐立社建物は8棟が復元できるが、多くは弥生時代中期～古墳時代前期で、一部が古代ないし中世である。即ち遺構は、おそらく削削された弥生時代の穴式住居に伴うと思われるが、このうち即ちSD004は特殊な状況あるいは断面形で、類例、性格が不明である。堅穴住居は弥生時代中期であろう円形住居が2棟復元され、また主柱穴の弥生時代後期に隣の方形堅穴住居の削削が可能であるものがある。遺物では、SD001 石敷遺構に埋め込まれた多数の飛鳥時代～奈良時代初期の古代瓦片があり、「井尻遺跡」とは距離があるが、開通施設の南路北端にあつた可能性を考えさせるものである。ガラス管玉は材質などから飛鳥時代と考えられ、類例が少ない貴重な事例である。その他の遺構は不確だが、弥生時代中期前半以前とみられる安山岩の石器が数点があった。弥生時代から中世までの遺構が比較的多く検出され、遺跡の北端付近の土地利用の変遷がより明らかになった。なお SD001 石敷遺構や、調査区上層の記録保存の時間省力化やより精度の高い記録のために、今回のような狭小な住宅地における反射照相撮影では、調査区全体の良好な全般写真を撮影・記録することが困難ことが多いが、本調査では多数の写真撮影によりSfM/MVS法による三次元計測を行い、3D画像をもとに全般写真や上層断面写真の一部、石敷遺構の写真・図面を提示しておきたい。

(表紙写真説明)

表表紙：SX001 石敷遺構 I 区第1面出土状況（3D画像垂直俯瞰写真）

裏表紙：(左上) SX001 石敷遺構 I 区第1面出土状況（東南東から）、(左2列目) SX001 石敷遺構 I 区第2面出土状況（南南西から）、(左3列目) SX001 石敷遺構 I 区第3面出土状況（東南東から）、(左下) SX001 石敷遺構 I 区第4面出土状況（東から）、(右上) I 区 SD002 ほぼ完掘状況（東から）、(右下) II 区調査状況ほぼ全景（手前 SD003 除く；西から）

